

跡見学園女子大学 地域交流センター主催
学園創立150周年 記念シンポジウム ブックレット

文化遺産がつなぐ 過去と未来

跡見女学校 明治・大正・昭和の暮らし

2026年3月発行



目次

歴史のリアルを掘り起こす	小仲 信孝	2
基調講演「遺跡が語る地域の記憶」	石神 裕之	3
報告①「明治期の跡見女学校」「大正期の跡見女学校」	若林 範子・小関 孝子	15
報告②「発掘された跡見女学校と明治の暮らし」	小野 麻人	24
報告②「柳町時代の跡見女学校の建物について」	渡辺 恵未	32
報告③「〈跡見「学芸員」in 菊坂〉が読み解く柳町周辺の様子」	黒木 真悠	36
質疑応答		40
閉会あいさつ	土居 洋平	43
シンポジウム参加者へのアンケート結果		44

歴史のリアルを掘り起こす

跡見学園女子大学学長
小仲 信孝

皆様こんにちは。跡見学園女子大学学長の小仲でございます。今日は学園創立150周年記念シンポジウム「文化遺産がつなぐ過去と未来」にご参加いただきまして誠にありがとうございます。

このシンポジウムを開催するに至った経緯をお話します。2020年から21年にかけて、文京区立柳町小学校の建て替えに伴って、文京区教育委員会が発掘の調査をされました。このシンポジウムは、それに端を発しています。その際、跡見学園にまつわる遺物も多数、発見されました。柳町小学校の敷地には、明治20年から昭和8年まで跡見女学校の柳町校舎がありましたので、発掘された多種多様な遺物は学園の歴史を物語る貴重なものばかりです。本日のシンポジウムは、その出土品を手がかりに、明治、大正、昭和の女学生の暮らしを蘇らせることを一つのテーマにしています。



私がかねがね、歴史上の人物を学ぶには、その人物が生きた時代に立ち戻り、実在したものによって生活のリアルを知ることが大切だと考えてきました。ある時期、樋口一葉の生活実感を知りたくて文京区内を歩き回ったことがあります。一葉は明治19年の8月、中島歌子の「萩の舎」に入塾しました。当時住んでいたのは、上野に黒門小学校がありますが、その裏手のところで、そこから安藤坂の萩の舎まで歩いてみたことがあります。湯島の切通坂を上って本郷三丁目に出て、後樂園へ下り、富坂を上って安藤坂まで、40分から45分ぐらいの道のりでした。ただ、一葉の時代は無論、道路は舗装されていません。しかも一葉は下駄履きです。当時14歳の一葉は、どんな思いで急な坂道を行き来していたのか、想像を巡らしていました。実際に一葉の生活空間を追体験してみると、書物からは見えなかった多くの気づきがありました。

私ども跡見学園の関係者は、創立者である跡見花蹊について、さまざまな文献資料すなわち文字情報から知る機会には恵まれています。ただ、ともするとそれに頼りすぎて、生身の花蹊=花蹊という人物のリアルには迫れていないところがあるかもしれません。本日のシンポジウムが、教育者としての花蹊と、そのもとで生活を共にしながら学んだ女学生たちのリアルを明らかにするきっかけになってくれることを願っています。

最後になりましたが、本日ご登壇いただきます京都芸術大学の石神裕之先生をはじめ、パネリストの皆様にご挨拶といたします。

基調講演「遺跡が語る地域の記憶」

京都芸術大学芸術学部教授
石神 裕之

はじめに

皆様、こんにちは。ただいまご紹介に預かりました、京都芸術大学芸術学部教授の石神裕之でございます。よろしくお願い申し上げます。

そもそも私がなぜここで話をするのかということですが、実はもう30年ほど前になりますが、学生時代に初めて考古学調査をいたしましたのが文京区でした。文京区での発掘調査が、私の考古学人生の始まりだったという側面もございます。そういった意味も踏まえて、本日呼びいただけたのだらうと思います。

私の専門は先ほどご紹介いただいた通り考古学ですが、考古学の中にも様々な種類がございますが、私がメインで専門としているのは江戸時代です。本日のシンポジウムのお話は、江戸時代よりもさらに新しい近代における発掘調査の話になりますが、皆様にこのお話をお聞きいただく上で、まずは「遺跡とは何か」という点を、ぜひ少しお考えいただきたいと思います。そこで、基調講演では「遺跡とは何か」を中心に話を進めていきたいと思っています。



1. 日本における遺跡の数とその定義

突然ですが質問です。全国に遺跡はいくつあるでしょうか。選択肢は、1：1万か所、2：10万か所、3：50万箇所、4：100万か所です。

正解は3番の50万箇所です。もう少し細かく申し上げますと、約47万2,000箇所ということでございます。これは、いわゆる文化庁が把握している遺跡の数です⁽¹⁾。

遺跡には様々な捉え方がありますが、その一つが文化財保護法という法律に基づいて守られている遺跡、すなわち「周知の埋蔵文化財包蔵地」と呼ばれるものです。実は、皆様がお座りになっているこの跡見の敷地も遺跡でございます。遺跡は非常に身近に存在しています。

遺跡というと、やや遠い存在のように感じられるかもしれませんが、例えば、最初のスライドでご覧いただいた三内丸山遺跡のような、縄文時代の非常に大きな遺跡をイメージされる方も多いかと思いますが、そうした場所では復元住居などが設けられ、公園化されています。しかし、実はそれだけが遺跡ではありません。遺跡は、様々な形態で残されています。その一つがこの後、お話をお聞きいただくことになる、跡見学園に関わる柳町遺跡です。

改めて、全国に約47万箇所ある遺跡であります、その内訳を見ていくと、一般的に奈良や京都が多いと思われるかもしれませんが、実は日本全国で一番遺跡が多いのは兵庫県です。このように、遺跡の分布をみても、イメージとは少し違うところがあるように思います。

2. 埋蔵文化財の脆弱性

少し難しい話になりますが、先ほど申し上げた埋蔵文化財についてもお話ししておきたいと思います。遺跡や遺物というと様々に捉えられますが、文化財保護法と呼ばれる法律の上ではいわゆる「埋蔵文化財」という扱いが主になります。考古学資料における文化財といえば、皆さんが思い浮かべるのは、火焰土器のような、美術館などで鑑賞できるものが多いかもしれません。例えば、かの岡本太郎さんも縄文土器を素晴らしいアートだと高く評価されました。我々が美術館などで、そうしたケースに収められ、見ることのできる完形の土器は、文化財の体系で見ると有形文化財に分類され、国宝や重要文化財として指定されます。

しかし、私たち考古学者が実際に扱う、遺跡から出てくるものは、例えばこのようなものです。このスライドは新宿で掘った江戸時代の遺跡から出土した大量の陶磁器の破片を整理する様子を写したもので、これらを体育館に並べ、分類していく作業を行います。この遺跡では、大体3トンほどの遺物が出土し、整理・分析にあたった3人が一人あたり1トンを分析しなければなりません。これは大変な作業ですが、考古学の世界では普通のことといえます。こうした破片をくっつけたり、洗ったりする地道な作業があって初めて、鑑賞に値する遺物となるのです。

これらの破片こそ、まさに埋蔵文化財という取り扱いがなされるものであり、住居の跡や、陶磁器の破片など、土地の中に埋蔵されている遺構や遺物の総称として用いられます。他方、有形文化財が指定文化財として予算措置がなされて保護されるのに対し、破片類はその全てが国宝や重要文化財になるわけではありません。埋蔵文化財は本来、多くの歴史を語ってくれるものでありますが、残念ながらその全てが皆さんの目に触れることにはなりません。いずれにせよ、こうした整理作業があって初めて、発掘調査の成果が明らかになるものであります。やはり考古学はロマンがある一方で、非常に地味で、労力がかかる学問であることはご理解頂ければと思います。

3. 遺跡が持つ「土地の記憶」の継承

こうした学問の中で、私が目的とするのは、遺跡の位置する土地の記憶をしっかりと継承していくことです。これは、私たち考古学の立場にある人間が発掘調査を行う際に、心に留めておかなければならない大事なポイントだと考えています。

たとえば東京都には、都がインターネット提供サービスとして開設している遺跡の地図情報を示すwebサイトがございます⁽²⁾。これを見ると、現在の跡見学園を中心とした小石川周辺も、色分けされた多くの遺跡が存在していることがわかります。そして地図上には、丸く塗ってあるところと、四角く塗ってあるところがあります。丸く塗られている場所は、明治時代以降に研究者が実際に歩き、土器などを拾って「ここが遺跡だ」と認められた場所です。それに対して四角く塗られている場所は、建物を建てる前に発掘調査が行われ、実際に遺跡が検出されて、その結果、公的に遺跡として認定された場所です。東京では、この四角く塗られた場所が多く認められますが、これらの場所は再開発が行われ、その結果として遺跡が発見されたということができません。古来、人の営みとは変わらないもので、生活しやすい場所には昔から人が住んでいます。こうした人が住んでいた痕跡が残っていれば、それがどのような残存形態であっても、基本的には遺跡に認定されるのです。

最近話題になった事例として、JR東日本の高輪ゲートウェイ駅周辺の再開発エリアで発見された高輪築堤跡があります。これは近代の鉄道遺産に該当し、新橋（汐留）・横浜間で汽車が日本で初めて開通した線路の土台部分などが発見されました。

・記録保存と破壊の運命

先ほどホールでの展示を見てきましたら、柳町遺跡で出土した杭が出ていました。低湿地の建物では、このような杭を使ってしっかりと基礎を構築することがよく行われます。ちなみに発掘された木製品などの遺物を発見した際には、そのまま何の処置もせず放置しておくとも腐ってしまうため、しっかりと自然科学的な保存処理を施さなければなりません。これには手間もお金もかかります。こうした開発に際して発掘が行われる場合、その発掘作業の費用は開発者が支払わなければならないため、多額のお金がかかっているにもかかわらず、その成果が市民の皆様にもきちんと還元されているのかどうか、という疑問を私は日々感じています。ですから、こうした講演などを通じて、皆様に考古学の現状をお伝えできるのは、大変ありがたい機会だと感じています。

さらに発掘と地域の記憶との関わりを考える事例として、新橋の近く、現在の虎ノ門ヒルズ付近、環状二号線という道路を通すために行われた発掘調査についてご紹介したいと思います。このあたりは、江戸時代には大名屋敷や旗本屋敷がたくさん存在していた場所でした。発掘してみると、現地表面から1メートル以上掘った付近に明治時代の地層が出てきます。

そしてその下には江戸時代の地層が確認できます。スライドで示しましたように、地層の色の違いを見ることが、どの時代に何があったのか（例えば赤い土が入っていれば火災があったこと）がわかります。

さらにその下を掘り進めると、古代あるいは縄文といった古い時代の地層が見えてきます。この場所は、元々は日比谷入江と呼ばれた海であり、時代が下るにつれて干上がって干潟になっていったことが、地層の状況から見て取れます。そしてさらに重要なのは、徳川家康が江戸に入り、江戸城を作り、江戸という都市を築こうとした際に、どのような土木工事が行われたのかということが、地層の状況からわかる点です。実は江戸がどのように作られたかという具体的な経緯は文献にはほとんど書かれておらず、よくわかっていません。この環状二号線の調査は、細長い範囲で日比谷エリアを横断するように行われたため、日比谷入江の埋め立ての具体的な経緯をある程度、把握することができました。

このように遺跡の発掘は、人が生活していた痕跡を捉えることも重要ですが、それ以外に、その土地がどのような経緯で開発されてきたのかという来歴を知ることができます。地形や地質を知ることが、我々が失ってしまった「土地の記憶」を呼び覚ます上で非常に重要であり、これこそが考古学、特に都市の考古学の役割であると私は考えています。

例えば柳町遺跡の第一次調査では、土層の断面図を見ると、近現代の跡の下に江戸時代の旗本屋敷があった層、そしてさらにその前、家康が入部してくるような頃は水田があったということが分かっています。その水田を埋め立て、土木工事をを行った結果、人が住めるようになり、旗本屋敷として活用されたわけです。それが近代には跡見花隠の屋敷へとさらに利用されていき、その痕跡も発掘されています。このように、遺跡というものは、土地の記憶をしっかりと繋いでいく媒体（メディアム）として存在しています。

よく、遺跡の発掘調査が行われた後「記録保存」を行ったと言われます。これは文字通り、調査を行って記録を残すということですが、それは逆に言えば多くの場合、その遺跡が撤去され、破壊されていくということでもあります。柳町遺跡も、新たに地上には建物が建つわけですから、遺跡としては壊されることとなります。実は全国で現在も遺跡はどんどん消滅しており、三内丸山遺跡のように残ってご覧いただける遺跡は、本当にごくわずかです。多くの場合、遺跡は壊される運命にあるからこそ、後世に記録を残さなければならない、という切実な思いを胸に、考古学に従事する人々は黙々と記録保存を進めているのです。

おわりに —遺跡の価値とは何か—

しかし、その記録保存のあり方についてもさらに課題があります。例えば、福岡県北九州市で発見された旧門司駅の遺構は、世界遺産を審査するイコモス (ICOMOS) という世界的NGO組織から、しっかり残すように提言があったにもかかわらず、地元自治体は庁舎建設のため残せないと判断し、いわゆる記録保存を行い建築計画が進められることになりました。

このように、遺跡には「残す」「残さない」という判断が伴います。どれを残し、どれを残さないのか、つまり世間における遺跡の価値とは何なのか、という点について、ぜひ皆様にも考えていただきたいのです。

埋蔵文化財は、保存環境、保管環境全てにおいて未だ脆弱です。表面に出てくる考古学の成果と、その裏にある難しい諸問題は、表裏一体の関係にあります。遺跡はどのように守られるべきなのか。行政が考えるのか、学術的に考えるのか、あるいは市民が評価するのか—様々な評価の仕方がありますが、実際にはこのどれでもない形で、遺跡を残すか残さないかが決められているのが現状です。こうした遺跡を残していくことが、その土地の記憶を残すことにつながっていきます。土地の記憶を継承していく上で、考古学の発掘調査による遺跡の資料は、ぜひ公開、活用していただきたいと考えます。

最後に、文化人類学者のレヴィ=ストロースが引用した文章をご紹介します。それは、景観を「先祖が作り出したもの」として捉え、「地形やその土地の景観はまさにその土地の歴史を残してきた家系図」である、というオーストラリア原住民の意識です⁽³⁾。

遺跡は土に埋まっていますが、遺跡発掘によって光を当てられ、新しい景観としてまた生み出されてきています。この一つ一つが全て、過去の祖先の行為、つまり活動の痕跡なのです。遺跡とは何か、と考えた時に、それはまさに、その土地に住んできた人々の全てであると言えます。遺跡というものは、このようにして歴史を継承してきている、非常に重要な要素なのです。

ご清聴ありがとうございました。

【注】

- (1) 文化庁ホームページ「参考資料：令和3年度 周知の埋蔵文化財包蔵地数」参照。
<https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/maizo.html> (2026年1月30日閲覧)
- (2) 「東京都遺跡地図情報インターネット提供サービス」
<https://tokyo-iseki.metro.tokyo.lg.jp> (2026年1月30日閲覧)
- (3) レヴィ=ストロース1976『野生の思考』大橋保夫訳、みすず書房



1



石神裕之

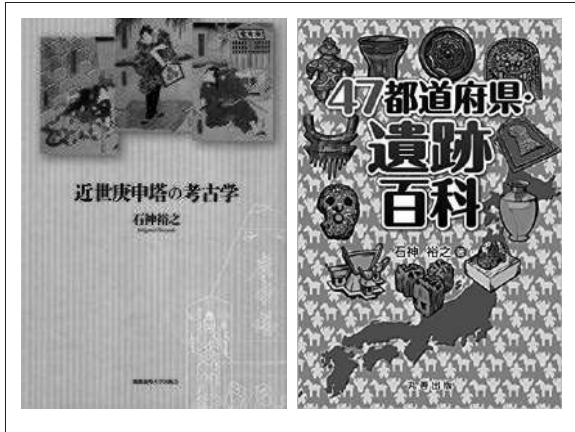
京都芸術大学 芸術学部
芸術学科 歴史遺産コース
教授

2005年
博士(史学・慶應義塾大学)

2007年~2013年
慶應義塾大学 准教授

2014年着任より、現所属。

2



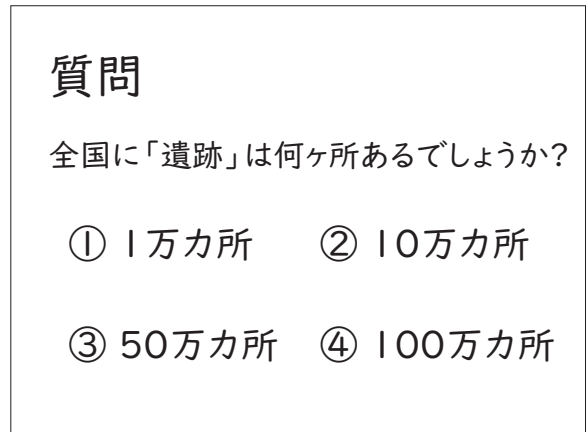
3



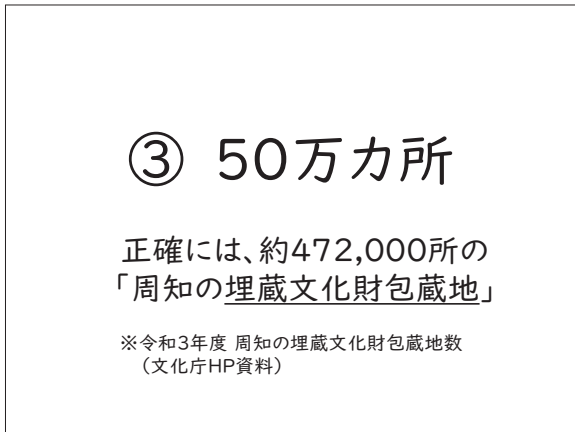
4



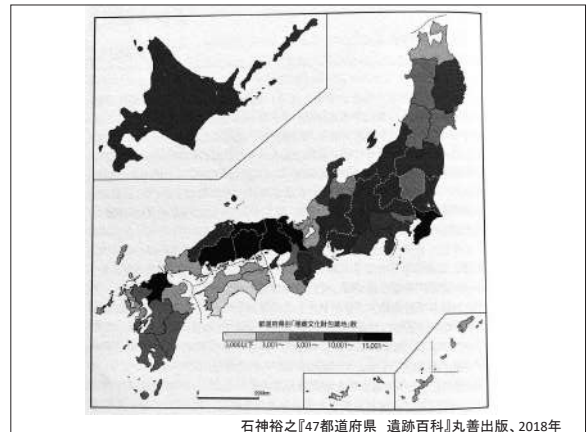
5



6

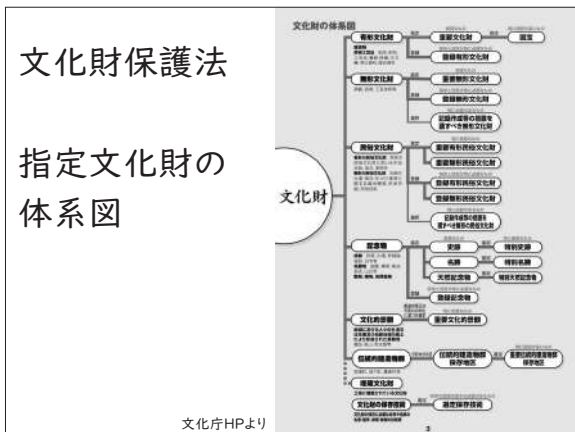


7

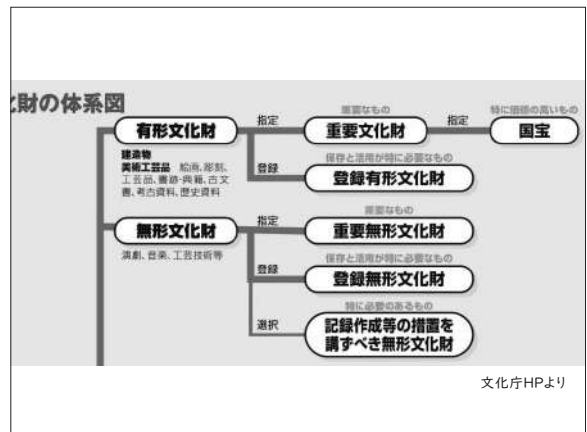


石神裕之『47都道府県 遺跡百科』丸善出版、2018年

8



9

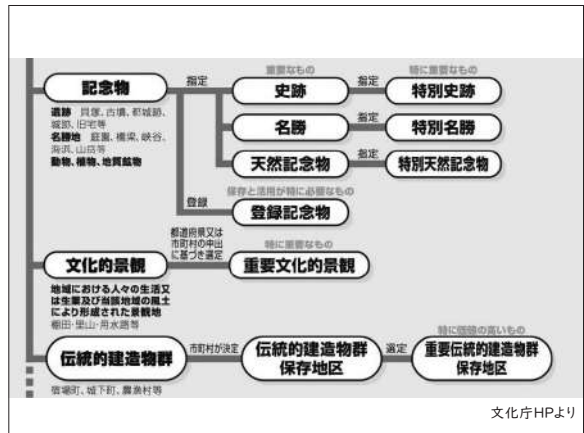


文化庁HPより

10



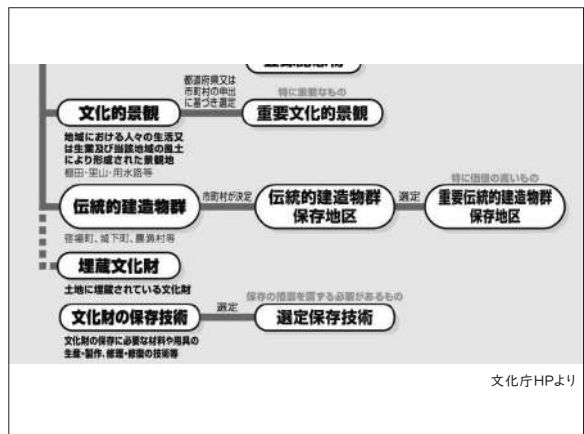
11



12



13



14



15



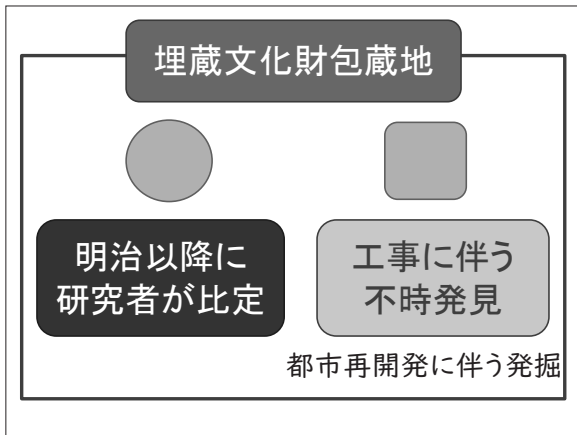
16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



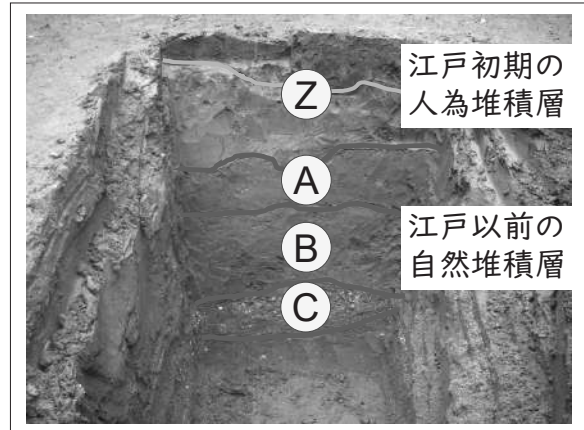
29



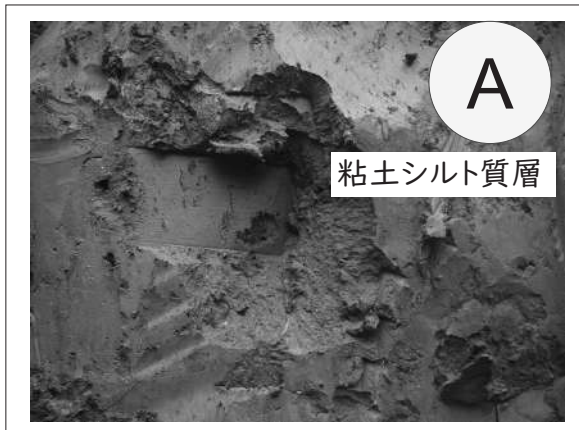
30



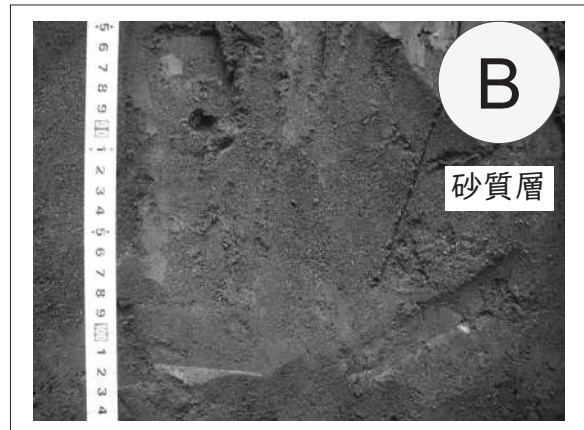
31



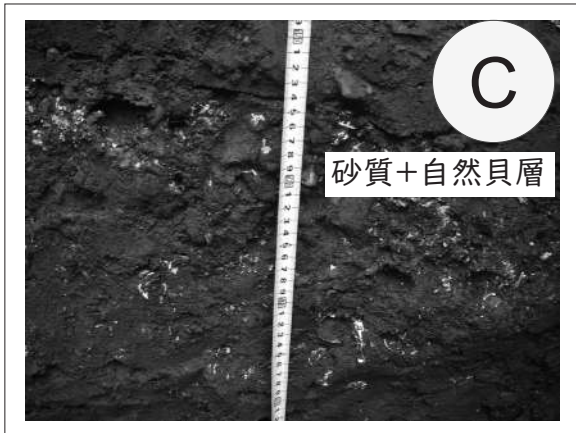
32



33



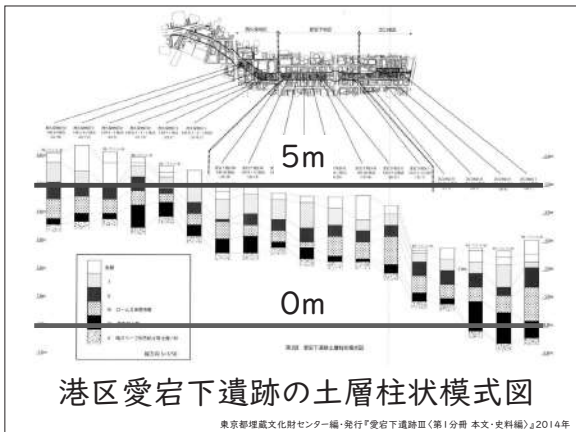
34



35



36



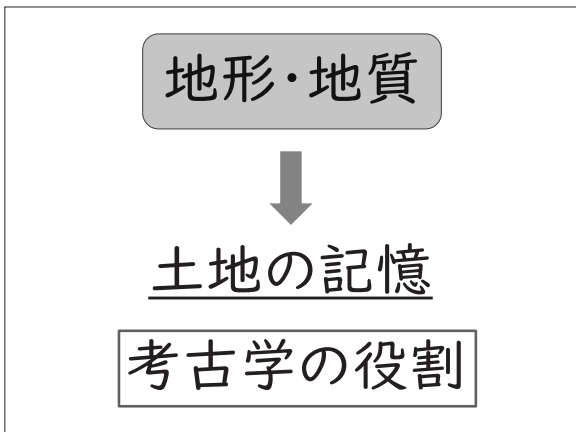
港区愛宕下遺跡の土層柱状模式図

東京都埋蔵文化財センター編・発行『愛宕下遺跡Ⅲ(第1分冊 本文・史料編)』2014年

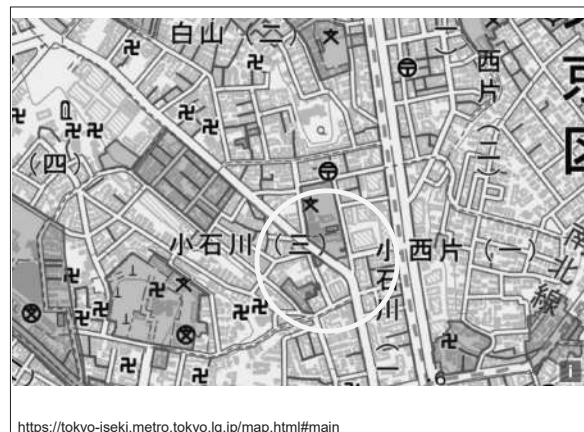
37



38



39



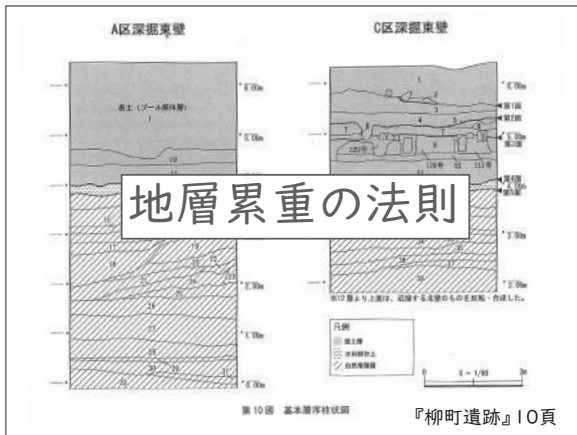
40



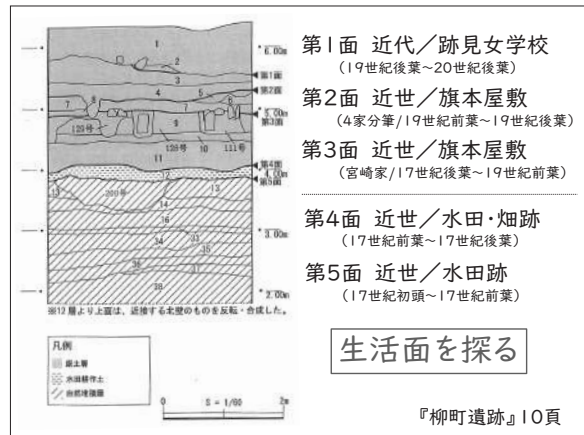
41



42



43



44

土地の記憶

過去と現在をつなぐ
メディアムとしての遺跡

45

記録保存範囲

https://www.jreast.co.jp/takanawachikutei/pdf/takanawachikutei_soukatsu.pdf

「発掘」とは・・・「記録保存」
 発掘調査を行い、「記録」をとること。
 その後、多くは「撤去」される。
 つまり「破壊」ということ。

46

旧門司駅舎跡の発掘調査成果

古代～近世門司港の片鱗と初代門司駅・近代門司港の形成

- はじめに
旧門司駅舎跡は、門司区新築に所在し、JR門司駅と九州鉄道記念館の間に位置しています。発掘調査では、明治24(1891)年に開業した九州鉄道初代門司駅の機関車庫・倉庫・石炭庫の遺構や、初代駅舎跡石垣・初代駅舎の築造建物や、大正3(1914)年に竣工した2代目門司駅(旧門司駅跡)時代の築造石垣・倉庫石垣の礎、近世門司港の旧海岸線やそこに築かれた護岸石垣、大正～平成時代までの遺構を確認しました(第8頁)。
- 旧海岸線の護岸石垣と古代・中世の遺物
調査区の東西方向に向かって順立前の旧海岸線と門司築港前の護岸石垣が確認されました(第2頁)。この石垣は、みよこ町所蔵の「小笠原文庫」に所収される「門司築港計画二十分之図」に描かれている「岸垣」であると考えられます。土層観察から、石垣の前面には泥が堆積しており、その上に築造・築造時の埋立土を被せていることが分かりました。この埋立土からは古墳・平安・鎌倉・江戸時代の遺物が出土しており、明治時代以降の門司港の歴史的変遷の片鱗を把握することができます(第7頁)。
- 初代門司駅の機関車庫とその基礎構造
機関車庫は、煉瓦をイギリス産のみで構築したもので、田

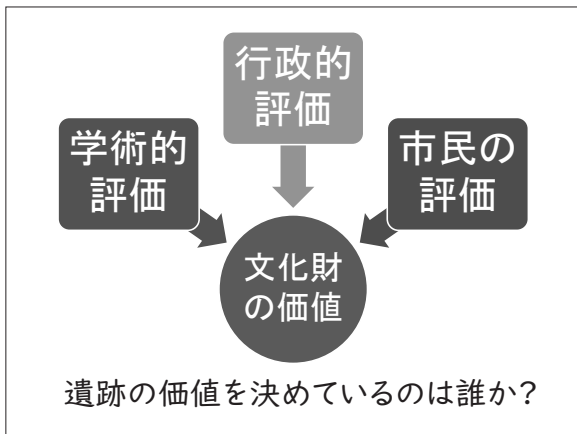
第1図 旧門司駅舎跡の位置と開発範囲
第2図 旧海岸線に築かれた護岸石垣と機関車庫

<https://www.kicpac.org/maibun/2024/04/16/61451aa6903e7ba6d94f62607a7d0d7d88212af.pdf>

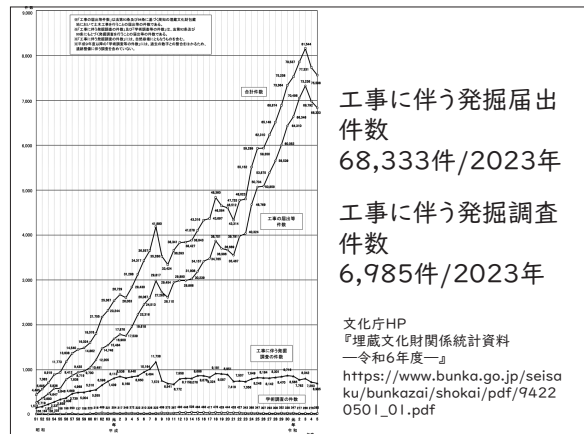
47

遺跡の価値

48



49



50



51



52



53



54



55



56



57



58

山や小川や泉や沼は、原住民にとっては単なる美しい景色や興味ある景観にとどまるものではない…。それらはいずれも彼の先祖の誰かが作りだしたものである。

自分を取り巻く景観の中に、彼は敬愛する不滅の存在〔祖先〕の功業を読み取る。これらの存在はいまも、ごく短時間、人間の形をとることができ、その多くを彼は父や祖父や兄弟や母や姉妹として直接的経験で知っている。その土地自体が彼にとっては、昔からあって今も生きている一つの家系図のようなものである

報告①

「明治期の跡見女学校」「大正期の跡見女学校」

跡見学園女子大学観光コミュニティ学部
観光デザイン学科准教授
小関 孝子

跡見学園女子大学花蹊記念資料館
若林 範子



皆様、ごきげんよう。私たちは第一報告をいたします。跡見学園女子大学観光コミュニティ学部の小関孝子と申します。花蹊記念資料館の若林と申します。二人で一緒に報告をいたします。よろしくお願ひいたします。第一報告では、地中に埋まっているものではなく、歴史資料という文化遺産が未来と過去をつなげてくれる存在であるという点に注目し、報告させていただきます。

【小関】

まずは「明治期の跡見女学校」について、小関より報告いたします。跡見花蹊先生の生い立ちや跡見女学校の開校の歴史については、すでに書籍（泉雅博・植田恭代・大塚博『跡見花蹊—女子教育の先駆者』2018年）がございます。三年前に開催されたシンポジウムでもこの書籍が紹介されておりました。跡見の先生たちの共著で書かれたこの本は、現在、跡見学園女子大学一年生の必修科目「花蹊の教育と女性の生き方」のテキストとして使用されております。わたくしがなぜ僭越ながら明治時代の跡見女学校について報告をするかと申しますと、このテキストを用いて「花蹊の教育と女性の生き方」の歴史部分を担当しているという理由からでございます。また今回は、開校150周年記念シンポジウムということですので、跡見女学校の開校時期に注目し、当時の史料から気がついたことを報告いたします。

資料のデジタル化によって、歴史資料をとりまく環境はここ数年で大きく変わりました。今までなかなか見つけることができなかった資料を発見しやすくなりました。そこで今回は、これまであまり注目されてこなかった史料とともに、明治期の跡見女学校の様子を探ってみたいと思います。

跡見学校が明治8年（1875年）に開学した当時、跡見花蹊先生はすでに非常に著名な方でした。具体的にどう著名だったのかが気になるところです。史料を探るなかで、明治9年7月発行の『名誉新誌 第15

号』に跡見花蹊先生の小伝が掲載されていることに気がつきました。開校後1年も経たない時期に小伝が書かれていたこととなります。

そのほかにも、明治10年の番付『五光雷名競』には、花蹊先生が書画に優れた人として名前が掲載されています(スライド10)。ちなみに、この番付では福沢諭吉は英学に優れている人として掲載されています。明治10年の番付で非常にユニークなものがありましたので、こちらをご紹介しますと思います。『皇国今古人名録』です。当時の有名な人と昔の有名な人を並べて楽しんでいるような番付です。この番付では花蹊先生が和泉式部の現代版と言わんばかりに二人の名前が並べられています(スライド12)。

そのほかのいくつかの史料からは、跡見女学校には華族の娘たちが多く通っていたことが裏付けられています。明治11年4月の新聞には、跡見女学校で行われた生徒の試験に関する記事があり、非常に有名な華族のお嬢様たちの名前が連ねて書かれています。この試験はペーパーテストのようなものではなく、覚えたことを披露するようなものだったようです。明治14年に上野で開催された第2回内国勧業博覧会の報告書には跡見女学校が出品した作品について、生徒の作品とは思えないほどの腕前の素晴らしい作品が並んでいたと記されています。生徒の作品も非常に優れていたとわかります。

このように明治初期の史料を読んでいると、跡見花蹊先生が想像していた以上に昔の方だったということに気づかされました。花蹊先生と同世代の著名人を並べてみることで、花蹊先生がどの時代に活躍されていたのかがより明確になります。花蹊先生は天保11年生まれです。「天保世代」と言うこともできるかもしれませんが。ほかに天保生まれの人を挙げてみると、福沢諭吉が天保5年生まれ、大隈重信が天保9年生まれ、渋沢栄一は花蹊先生と同じ天保11年生まれ、伊藤博文は天保12年生まれですから年下ですね。跡見花蹊先生がどういう人たちと同世代だったのかを改めてみてみると、跡見花蹊先生は新しい時代がはじまったばかりの激動の時期に女子教育を切り開いたということに改めて驚きました。つまり、跡見女学校は女子教育の黎明期のさらに黎明期にスタートした学校ということになります。例えば津田梅子(1864年生まれ)は花蹊先生の24歳下ですから1世代下です。平塚らいてう(1886年生まれ)は2世代ほど下になります。『青鞥』が創刊された明治44年(1911年)当時、平塚らいてうは25歳、跡見花蹊先生は71歳です。歴史上の人物たちが何年生まれだったのかを並べて見ると、明治という時代のなかで跡見女学校がどのような存在だったのかが改めて浮かび上がってきました。

こちらで明治時代の報告を終わらせていただきます。

【若林】

私からは、昨日、跡見学園女子大学花蹊記念資料館で開催した企画展「跡見花蹊と跡見女学校一紡がれる歴史と伝統」について、その一部を簡単にご紹介させていただきます。

今年度は跡見学園創立150周年、来年度が跡見花蹊の没後100年ということで、花蹊記念資料館でも花蹊先生や跡見学園に関する特別な展示を、回数を増やして行っています。跡見学園創立150周年記念企画展「跡見花蹊と跡見女学校」は、前期と後期に分けて開催しており、本展は今年の3月から開催された前期展「開学への歩み」に続く後期展となっております。前期展は、先生の生い立ち(どんな師匠に学んだかなど)から跡見学校開学までの歩みをたどるものでしたが、後期展では、開学後に花蹊先生の精神がどのように受け継がれていったのかに焦点を当てています。

今回の展示の中でまず注目していただきたいのが『跡見花蹊日記』です。花蹊先生が22歳の頃にあたる文久元年から、87歳で亡くなる前年の大正14年まで、生涯を通じて記された膨大な日記です。跡見花蹊を研究する人にとってはまさにバイブルともいえるような、かけがえのない一次資料です。

初期の14冊は和装で綴られていて、明治25年以降は、洋装で綴られた、市販の日記帳に記されています。洋装の日記が33冊あり、今回の展示では、和装と洋装を合わせて合計47冊を一挙公開しております。

『跡見花蹊日記』は、学園創立130周年の記念事業として活字化され、製本化されています。原本は花

蹊先生の直筆によるもので、本学の先生方が長年にわたり読み下し作業を進めてこられ、その成果として製本化されました。今回のように原本を展示資料として一般公開するのは初めてのことで、この機会に是非ご覧いただければと思います(スライド21)(スライド22)。

また、花蹊先生が授与された勲章も展示をしています。先生は亡くなられた時に従五位下^{じゅうごいのげ}を授与されました。今回の展示ではこちらの現物をご覧いただけます(スライド23)。

こちらの写真は、小石川柳町校舎の新築記念に撮影された写真になります。花蹊先生の隣に映っている右側の女性は、跡見女学校の2代目校長を務められた跡見李子先生です。

李子先生は、萬里小路家の次女として京都で生まれました。幼い頃から花蹊先生に学び、8歳の時、明治8年の開学と共に跡見学校に入学し、第1回の卒業生としても名前を連ねています。花蹊先生は生涯結婚せず、子どももいませんでしたが、小石川柳町へ校舎を移したこの時期に李子を養子に迎えました。李子先生は後に跡見女学校2代目校長となり、跡見学園の初代理事長や跡見学園短期大学の初代校長も務めています(スライド24)。



小石川柳町新築記念 花蹊と李子
跡見学園女子大学花蹊記念資料館蔵

李子先生の功績としては、まず、小石川柳町校舎からここ大塚(文京キャンパス)の地への移転が挙げられます。また、現在の和光市の白子という土地を購入したのもこの李子先生の時代のことです。ここは後に東京オリンピックのために国に供出されましたが、その代替地である新座キャンパスを基盤として、跡見学園女子大学の開学につながっていきます。

李子先生が校長に就任したのは大正8年ですが、それから間もない大正12年に、約7ヶ月間、欧米の女子教育の視察に訪れました。これは文部省から調査を委託されたことでした。李子先生は帰国後も学園の発展に力を注ぎ、教育制度の変化にも柔軟に対応しながら、中学校、高等学校、短期大学、女子大学と組織のかたちを変え、現在までバトンを繋いでくれました。先生の精神が今こうして受け継がれているのは、李子先生のご尽力によるところが大きいと言えるでしょう(スライド26)。

展示では、当時の文部省から通達された文書の原本や、李子先生が実際に使っていたパスポートなども展示しています。新しいものを積極的に取り入れ、常に視野を広げていこうとするその姿勢は、今の私たちにとっても大きな示唆を与えてくれるのではないのでしょうか。その他にも、花蹊先生の代表作《秋草図屏風》なども展示しておりますので、新座キャンパスにもぜひ足をお運びいただければ嬉しく思います。

【小関】

それでは、この報告①のクライマックスに入りたいと思います。

明治、大正、昭和、令和と実は繋がっている、跡見学園にとって非常に重要な文化遺産がございます。その一つに校歌「花桜」が挙げられるのではないのでしょうか。

(中略：校歌「花桜」の作詞者や校友会泉会機関誌『汲泉』との関連についての説明)

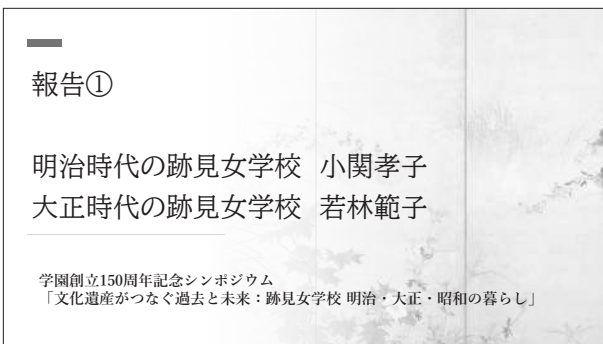
そして、ずっと歌い継がれてきたこの校歌「花桜」が初めて歌われたとされている、明治34年4月1日の卒業式では、3つの校歌が歌われていたということが『汲泉』第3号(明治34年5月発行)から分かりました(スライド37)。

(中略：『汲泉』第2号に掲載されていた跡見花蹊作詞の「学びの窓」と「教えの場」という2つの校歌の

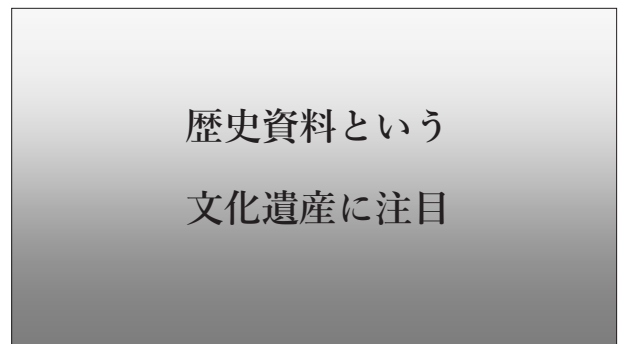
歌唱披露)

歴史資料の中にも、様々な文化遺産がまだまだ眠っているかもしれません。この思いを是非、未来へと繋げていきたいと考えます。跡見花蹊先生から李子先生へとそのバトンが繋がれ、そして現在私たちがここでこのような150周年の記念シンポジウムで登壇できること、大変光栄に、そして嬉しく思っています。

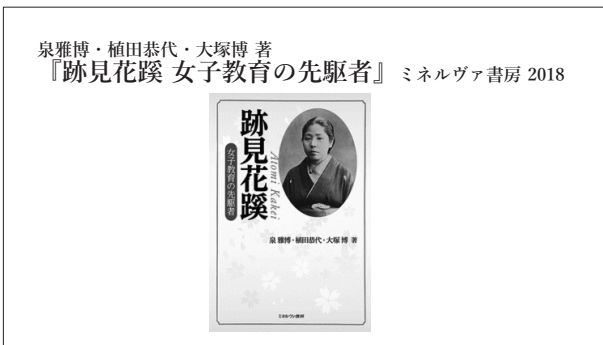
以上、拙い報告でしたが、これにて報告①を終わります。皆さん、どうもありがとうございました。



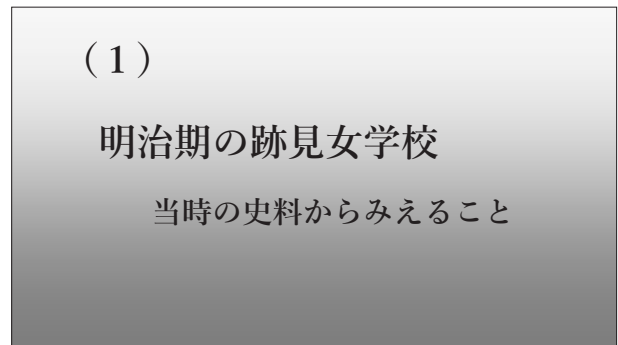
1



2



3



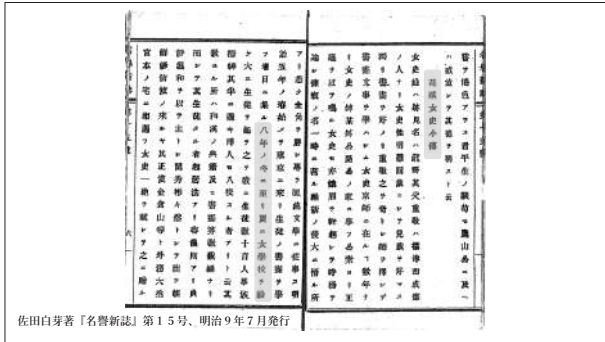
4



5

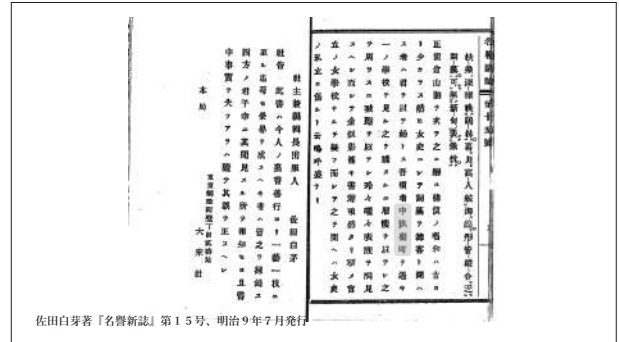


6



佐田白芽著「名譽新誌」第15号、明治9年7月発行

7

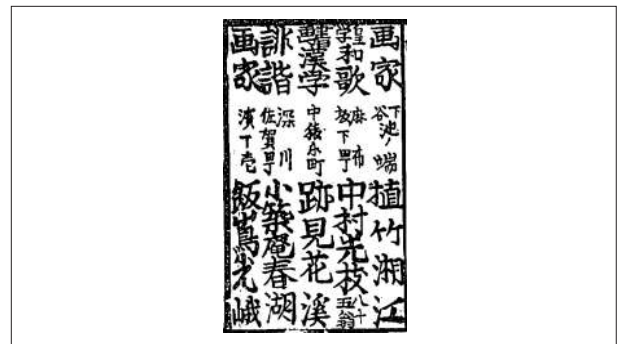


佐田白芽著「名譽新誌」第15号、明治9年7月発行

8



9



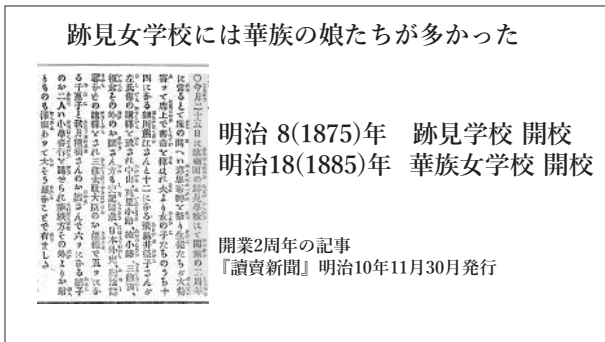
10



11



12



13



14

跡見女学校の生徒たちの作品に対する評価



跡見女学校の生徒の作品が、明治14(1881)年に上野で開催された第2回内国勸業博覧会に出品され、高い評価を得ていた。

『第二回 内国勸業博覧会報告書』明治16年より

15

跡見花蹊は「天保世代」

福沢諭吉	天保5 (1835) 年生まれ
坂本龍馬	天保6 (1836) 年生まれ
大隈重信	天保9 (1838) 年生まれ
跡見花蹊	天保11 (1840) 年生まれ
渋沢栄一	天保11 (1840) 年生まれ
伊藤博文	天保12 (1841) 年生まれ

16

跡見女学校の開学は
女子教育の黎明期のさらに黎明期

跡見花蹊	天保11 (1840) 年生まれ
昭憲皇太后	嘉永2 (1849) 年生まれ
下田歌子	嘉永7 (1854) 年生まれ
津田梅子	元治元 (1864) 年生まれ
樋口一葉	明治5 (1872) 年生まれ
平塚らいてう	明治19 (1886) 年生まれ

17



18

(2)

大正期の跡見女学校

花蹊記念資料館 展示のご紹介

19



20



21



22



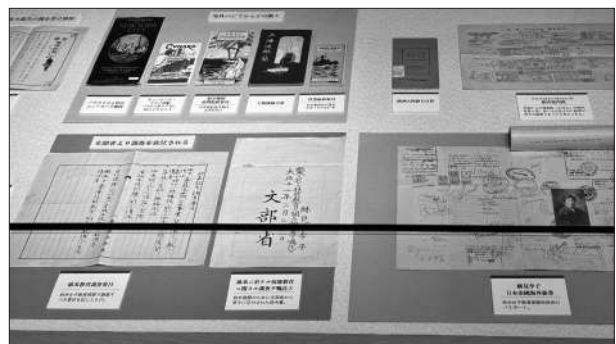
23



24



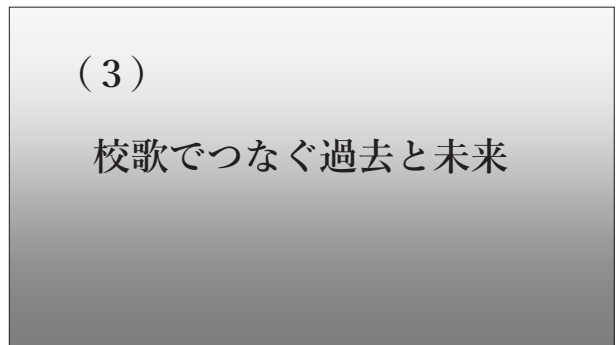
25



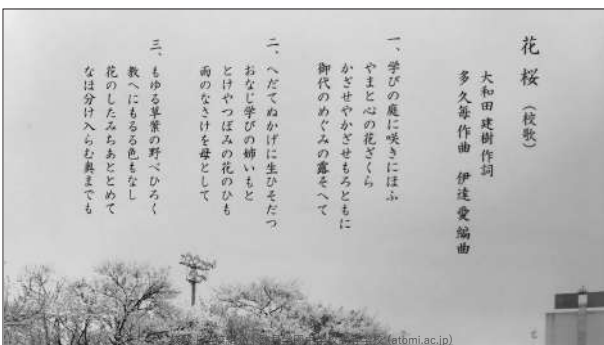
26



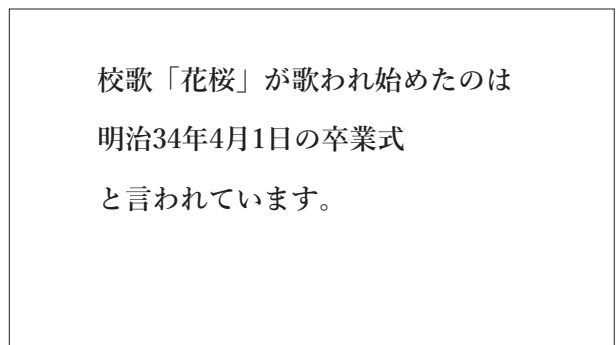
27



28



29



30

作詞者：大和田^{たけ}建樹（1857-1910）

- ・ 詩人、作詞家
- ・ 明治中期に跡見女学校で教鞭をとっていた
- ・ 主な作品「鉄道唱歌」「故郷の空」など



JR新橋駅の汐留口には「鉄道唱歌の碑」があります

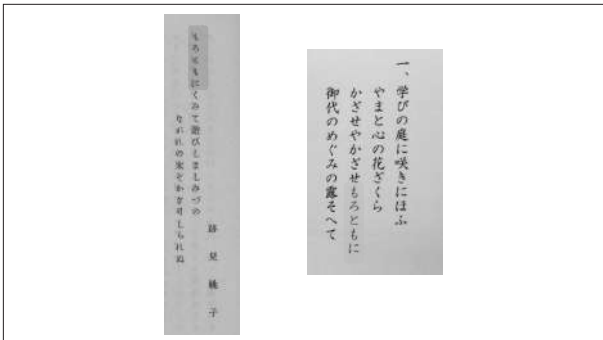
31

『汲泉』 1900年～現在

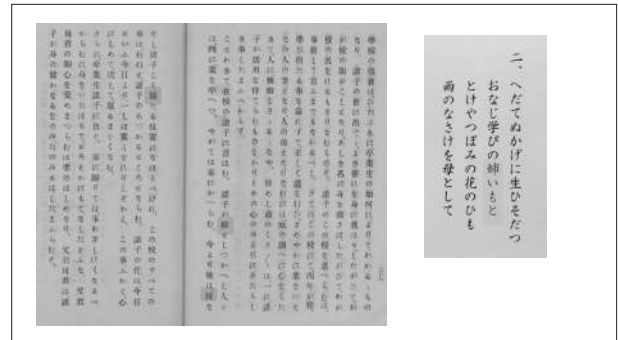
- ・ 「跡見校友会泉会」の機関誌（非売品）。
- ・ 明治33（1900）年6月の創刊以来、今日まで続く。



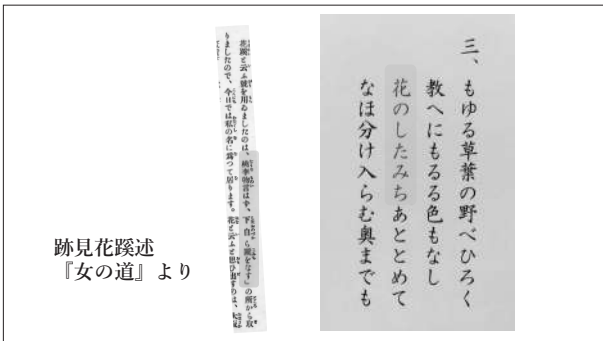
32



33



34



跡見花蹊述
『女の道』より

35

校歌「花桜」が歌われ始めたのは
明治34年4月1日の卒業式
とされています。
式では3つの校歌が歌われました。

36



37



38



39

校歌「学びの窓」第一節（跡見花蹊 作詞）

まなびの窓のとし月は
ただひと時のいとまだに
ちぢの黄金にまざるなり
たふとく思ひておこたるな

跡見文芸会『漢泉』第2号、1900、p7

40

校歌「教への場」第一節（跡見花蹊 作詞）

をしへの庭のまじはりは
高きいやしきへだてなく
はらからのごと親しみて
むつびあふこそめでたけれ

跡見文芸会『漢泉』第2号、1900、p8

41



42

報告② 「発掘された跡見女学校と明治の暮らし」

テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部
小野 麻人

皆様こんにちは。ただいまご紹介に預かりました、テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部の小野麻人と申します。まず、私の方から発表させていただきまして、次に渡辺の方から発表をしたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

私からは「発掘された跡見女学校と明治の暮らし」というテーマでお話をいたします。

本日のお話は大きく2つございます。(スライド2)

一つ目は、明治後半から昭和初期の柳町遺跡における発掘調査の成果に対して、古写真や跡見花蹊の日記などを参照し、明治時代の暮らしというものを描いてみたいと思います。

二つ目は、新座キャンパス内に移築されております不言亭^{ふげんてい}、これは柳町時代からの唯一の現存建物なのですが、その不言亭と周りにある景石群についての調査成果をご報告させていただきます。

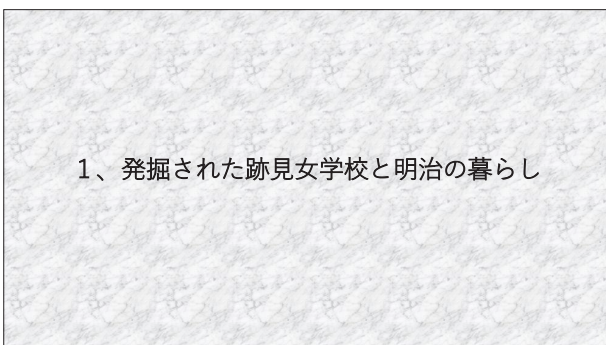
まず初めに、これは現在の柳町小学校付近の地図に、跡見女学校の旧敷地を重ねたものです。(スライド4) さらに南側には、現在暗渠になっていますが、千川という川(小石川の地名の由来となった



本日のお話

- 1、発掘された跡見女学校と明治の暮らし
- 2、柳町時代唯一の現存建物 ー 不言亭ー

2



3

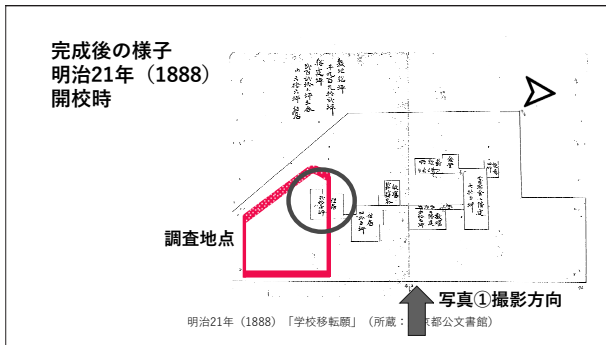
はじめに

柳町遺跡第1次調査 (赤枠内)
令和2年 7月～11月

柳町遺跡第2次調査 (緑枠内)
令和5年 9月～令和6年 5月



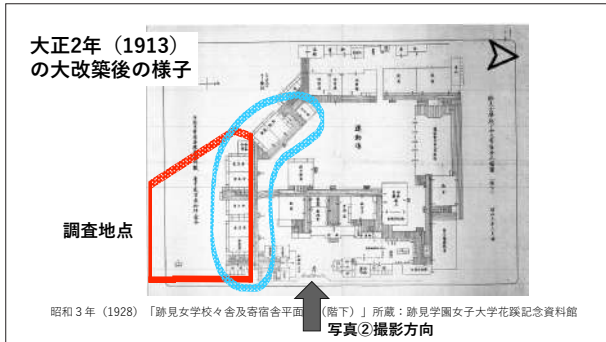
4



5



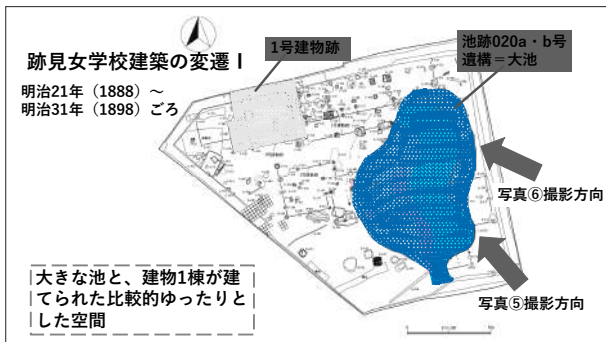
6



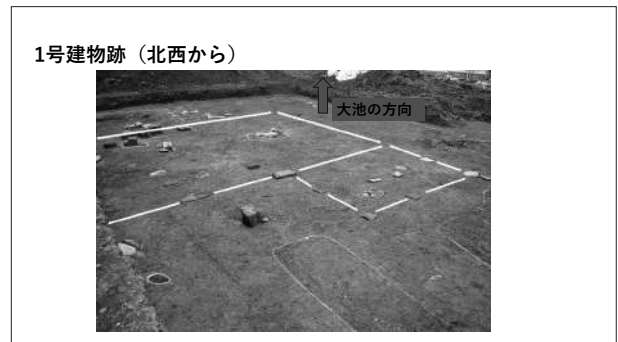
7



8



9



10

川)が流れていました。この敷地に対して、第1次調査、それから第2次調査というように、2回にわたって発掘調査が行われました。

第2次調査については現在、再来年の報告書刊行を目指して整理作業中のため、今回は2022年に報告書が刊行されています第1次調査の成果を元にお話をしたいと思います。

まず初めに明治20～21年(1887～1888)に神田から移転した直後の跡見女学校の図面と、発掘調査地点を重ねてみます。(スライド5)調査地点には、この図面に「住居」と書いてある建物が引かかっています。

当時の跡見女学校の様子を映した写真で見ると、調査地点はこの敷地の端の方にあたります。(スライド6)

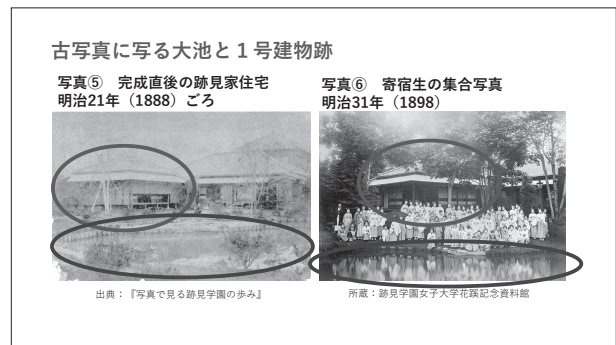
この跡見女学校は、女子教育の高まりと共に入学者が急増し、校舎が手狭になったため大改築が行われました。それが大正2年(1913)の大改築後の様子です。(スライド7・8)この時、敷地いっぱいに建物が建てられ、調査地点にも建物(寄宿舎)がかかっていることが分かります。

実際に出土した遺構をみてみましょう。まず、跡見女学校の建築の変遷1として、大きな池と建物1棟(1号建物跡)が建っていた比較的ゆったりとした空間がありました。(スライド9)

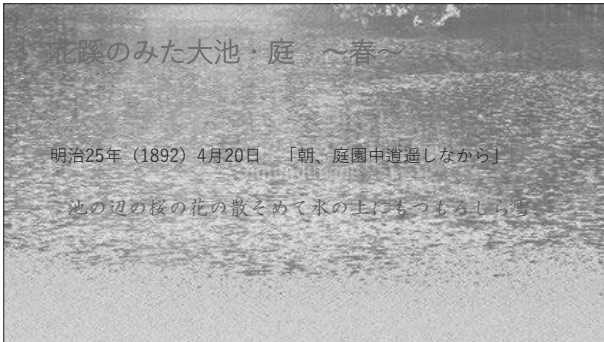
1号建物跡はご覧の通り、礎石^{そせき}建てのシンプルな建物です。(スライド10)大池は、後に廃絶されたため



11



12



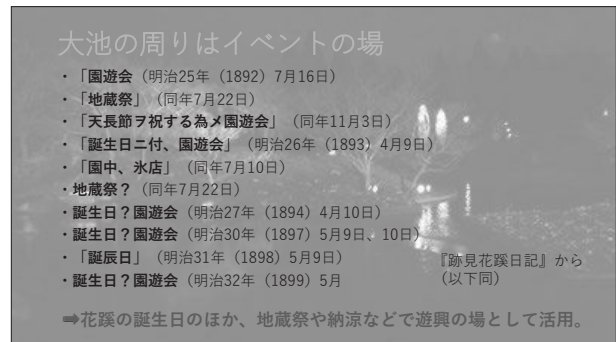
13



14



15



16

残存状態は悪く、周囲の土留め板や杭もほとんどが抜かれており、掘り込みだけが検出されました。(スライド11) 明治時代にこの建物と大池を映した写真が2枚残っており、手前に大池があり、背後に花蹊の居室と見られる建物 (1号建物跡) が確認できます。(スライド12)

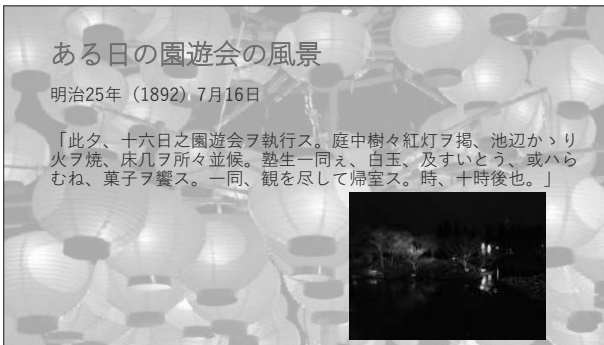
次に跡見花蹊が日記に記した大池周辺の風景や、その利用方法を見てみます。

春の風景としては、明治25年 (1892) 4月20日の日記に「池の辺の桜の花の散そめて 水の上にもつもるしら雪」という和歌が読まれており、池に落ちた桜の花びらを白雪に見立てています。(スライド13) このことから、池の周りに桜の木が多く植わっていたことが推測されます。

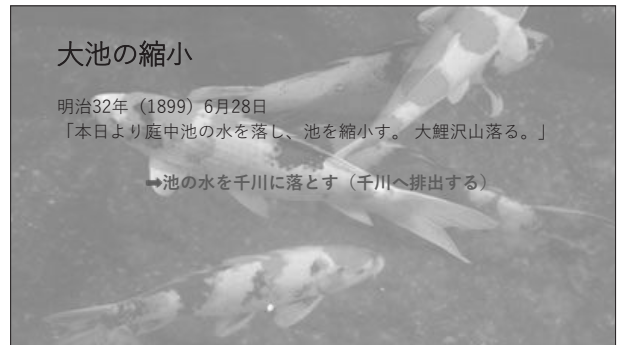
秋の風景 (明治26年11月29日) では、庭園の様子を「庭園楓樹及錦木ドウダン、実ニ未曾有。秋色錦繡のごとく 本月の初めより染出して、今に衰えず、朝夕遊行して妙ト言のみ。」と記しており、楓などの色づいた紅葉の様子を「錦にしきのようだ」と讃えながら、朝夕と散歩していた花蹊の姿が浮かびあがります。(スライド14)

冬の風景 (明治32年) では、「朝戸明けてみれば、密雪紛々として積こと三、四寸計にして、庭の景色の面白さに、この庭を写して賞款やます。」と記しており、雪景色も格別であったようです。また、それを画に写して創作の場としていた事も分かります。(スライド15)

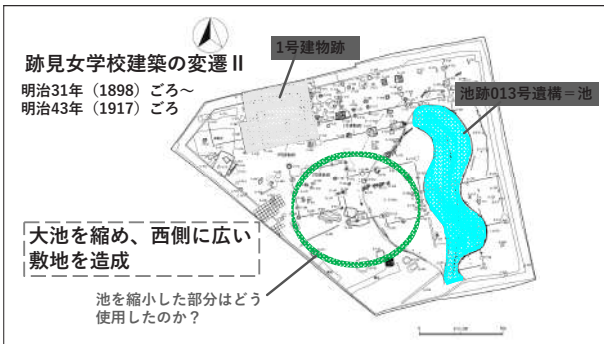
この池や庭園は、女学校ではイベントの場として使われていました。(スライド16) 花蹊の誕生日の他、



17



18



19



20

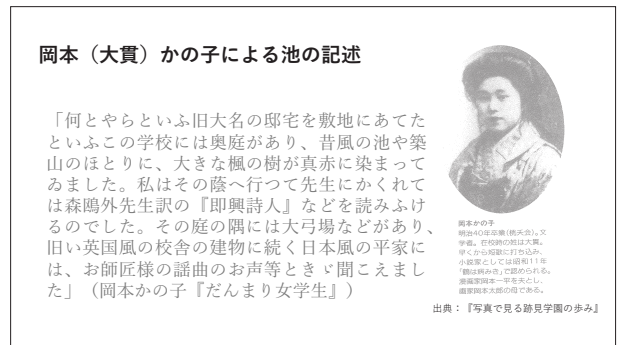
地蔵祭（主に近畿地方で行われる子供たちのお祭り）や納涼などで、遊興の場として活用されていたことが日記に記されています。地蔵祭は、関西出身の花蹊が東日本でもこうした行事を取り入れたことがわかります。

ある日の園遊会（明治25年（1892）7月16日）の様子では、庭園の樹々に紅い提灯を掲げ、池の側でかがりびかがりび篝火を焼き、所々に床几を並べ、生徒一同に白玉、水飴（精製したところてん。京阪地方の言い方）、ラムネ、菓子などが振る舞われたとあります。（スライド17）また、別の日の記述では、弁当やレモネードの提供、茶席を設けて生花を展示したり、生徒による演舞や琴の演奏の披露、長唄の師範を余興に招くなど、池が華やかな遊興の場として活用されていたことがわかります。

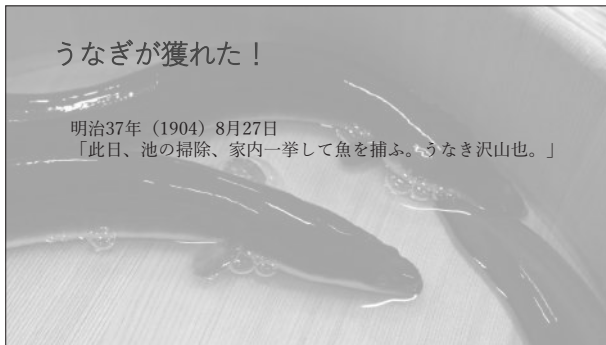
このように花蹊が愛し華やかな場であった大池ですが、学校の拡張のために縮小を余儀なくされます。明治32年（1899）6月28日の日記には「本日より庭中池の水を落し、池を縮小す。大鯉沢山落る。」と記されており、池の水を南側に流れていた千川に落として排出・縮小したと思われます。（スライド18）鯉ごと川に落としているのがなんともすごいですね。

大地を縮めて西側に広い敷地を造成したのが、跡見女学校建築の変遷2です。（スライド19）縮小後の池は、平面の形が「心」という漢字をかたどっているように見え、おそらく心字池であったのではないかと考えられます。（スライド20）心字池は、禅寺の方丈などで用いられ、心・精神・核などを意味し、沈思黙考・反省を促すという禅的な意味を持ちます。これは花蹊の心情を反映したものではないかと推測されます。ちなみに、この縮小された池の星印あたりから、後ほどご紹介する拳銃型の玩具が出土しています。

次に明治40年（1907）の卒業生である岡本かの子（歌人・小説家。芸術家岡本太郎の母親）の作品の中には、「昔風の池」や「大弓場など」があったと書かれています。（スライド21）この記述から、池の周りは生徒が自由に入れる空間で、池の傍らに大弓場、つまり弓道場があったことがわかります。池を縮小して



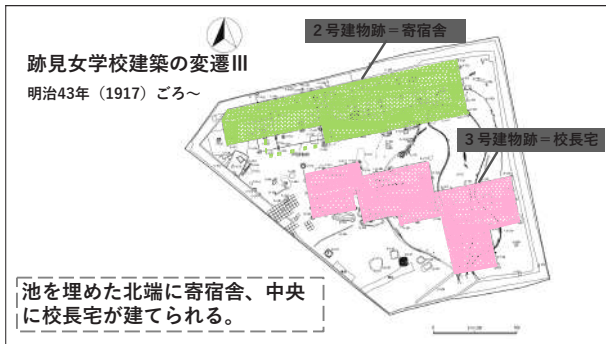
21



22



23



24



25



26



27

できた西側の広い空間には、この弓道場が作られたのではないかと考えています。実際、この頃から花蹊の日記中に「弓術会を催す」という記述が散見されるようになります。

また、この池では、なんとウナギが捕れたという記述が花蹊の日記にあります。(スライド22) 明治37年(1904)8月27日の日記には「此日、池の掃除、家内一挙して魚を捕ふ。うなぎ沢山也。」と記されています。海で産卵し川を遡上してくるウナギが千川から池に入ったのか、あるいは養殖されていたのかは不明ですが、とにかくそうした池でもあったようです。

しかし、この池もついに完全に埋め立てられてしまうことになります。(スライド23) 花蹊の無念が伝わるかのように、明治42年(1909)10月の日記には一言だけ「池の水上る。」と記されています。この埋め立てが行われた層からは、庭園の景石の一部とみられる石材が出土しています。

池を埋め立てた結果、跡見女学校の建築の変遷3として、池を埋めた北側に寄宿舎(2号建物跡)が、そして中央に校長宅(3号建物跡)が立てられました。(スライド24・25) このことから、学校拡張のために池が埋められたことがわかります。校長宅については、外観の写真が手に入らなかったものの、日記によると、跡見家の住宅は2階建ての日本館と平屋の洋館が組み合わさった建物だったそうです。(スライド26) 明治後半の段階では、上流階級の住まいであり、和洋折衷のイメージだったと推測されます。

次に、柳町遺跡から出土した遺物のうち、注目される2点をご紹介します。まず、大池から出土した薬

中村正修（まさなが）（1855～？）

アメリカフィラデルフィア歯科大で歯科医学士取得。
帰国後、明治24年（1891）に小石川区江戸川町18番地で開業した歯科医。

「市内有数の歯科医なり」（明治36年『人事興信録』）

28

足踏みエンジンで治療する西洋歯医者
『風俗画報』第232号 明治34年（1901）

『跡見花蹊日記』

- ・明治33年（1900）7月1日
「朝、歯医中村氏二行、埋てもらひて帰。」
- ・明治36年（1903）6月24日
「午下、余、中村正修氏え歯の療治に行。」
- ・同年10月10日
「午下、中村歯医師え行。」
- ・明治40年（1907）11月23日
「朝、中村歯医師二行。糸切歯二金を巻付ル療治畢る。」

29

歯の博物館（神奈川県横浜市）

『跡見花蹊日記』

- ・明治42年（1909）1月28日
「予、歯痛にて中村え行、治療す。」
- ・明治45年（1912）8月4日
「朝より中村歯科医に行て治療を受て帰。」
- ・同年8月31日
「朝食後、車にて中村歯医師に行、治療す。」

30

中村正修は、跡見花蹊かかりつけの医師であった。

⇒文献史料（『跡見花蹊日記』）と、出土遺物（「薬歯磨」）が合致する稀有な例

31

注目される遺物 2 子どもが池に落とした？ハイカラおもちゃ
○拳銃型玩具（池=013号遺構出土）



左：実際の出土品
右：ペンテージ玩具として販売中の品

- ・1890年 米国 J & E スティーヴンズ社製の鑄鉄玩具
WHITE CAP（ホワイトキャップ）
- ⇒女学生の持ち物とは考えにくいことから、跡見家の男児（泰など）の所持品か

32

2、柳町時代唯一の現存建物

— 不言亭 —

33

歯磨の蓋です。（スライド27）これは小石川の中村正修^{なかむらまさなが}という歯科医師が製造したものでした。中村正修はアメリカで学び、東京市（当時）内有数の歯科医として小石川で開業していました。（スライド28）この中村歯科は、現在の水道一丁目の凸版印刷本社の東側付近にあって、柳町から通うのに非常に近い場所がありました。花蹊の日記を調べたところ、明治36年（1903）に「中村正修氏え歯の療治に行。」と書かれていたり、明治後半に少なくとも7回は通院していたことが判明しました。（スライド29・30）中村正修は花蹊のかかりつけの医師であったことが分かります。これにより、文献資料（花蹊日記）と出土遺物（薬歯磨）が合致する、極めて貴重な事例となりました。（スライド31）ただし、花蹊以外の家族も中村医師にかかっていた可能性はありますので、これが即花蹊先生の歯磨き粉の蓋とは言い切れません。

次に、縮小された池跡の方から出土した拳銃型のものです。（スライド32）これは1890年にアメリカで製造されたもので、鑄鉄製になります。これはどう考えても女学生の持ち物とは考えにくいので、花蹊の甥である泰^{ゆたか}などの跡見家の男児の所持品だったのではないかと推定しています。泰は1890年であれば当時6歳であり、おそらくハイカラなアメリカ土産としてもらった物を池に落としてしまったのかもしれませんが。

駆け足とはなりますが続いて、柳町時代から唯一現存する建物である不言亭についてお話しします。（スライド33）不言亭は、大正8年（1919）に花蹊が80歳の祝いとして交友会から書齋として贈られた建物です。（スライド34）「不言^{ふげん}」という名は、「桃^{もも}や李^{すもも}の木は物を言うことはないが、実を取るために自然と人が

不言亭建築の経緯

- 大正8年(1919)、花蹊80才の賀に校友会より書斎が贈られた。

「新記念書斎」

- ➡大正5年南端に移転した校長新宅がさらに増改築された

不言とは。

『史記 李広伝賛』中の「桃李不言、下自成蹊」から取った花蹊の号の一つ。
幕末の17才から19才の時、京都に遊学していた際の住居に「不言亭」と名付けていた。

34

現存する不言亭

大塚を経て、昭和47年に新座キャンパスの一角に移築。



35

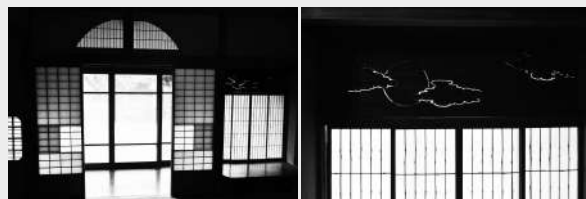
現存する不言亭



外観

36

不言亭の内部



付書院など

「月に叢雲」
完璧な月にも雲がかかるように、「好事魔多しで己を戒める」の意味で花蹊多しで己を戒める意味で入れたものか。

37

不言亭の内部



網代天井(茶室)、棹縁・欄間は煤竹(すすたけ) 床柱は京銘竹?

38

不言亭周辺の石造物や景石群

- 不言亭の庭と周辺には来歴不明の多くの石が置かれている。
- 入口の石碑は、柳町時代の校内のせせらぎに架けられていた石橋だという。



石碑
安山岩
(箱根系)

39

集まってきて下に道ができる」という、人徳がある人の周りには自然と人が集まるという意味の例えから取られています。花蹊はこの言葉を「花蹊」という号や「不言」という名に使用しており、不言亭という名もこれに由来します。この建物は、大塚を経た後、昭和47年(1972)に新座キャンパスの一角に移築され、現在は茶室として利用されています。(スライド35・36)

内部は、付書院などがあり、洒落た造りになっています。書院の上の欄間には「月に叢雲」というモチーフが刻まれており、これは完璧な月にも雲がかかるように、「好事魔多しで己を戒める」という意味で花蹊が取り入れたものではないかと予想しています。(スライド37) また、茶室の天井は網代天井で、棹縁や欄間には、囲炉裏の上で100年以上燻さないといふ色にならない煤竹(すすたけ)という高級な素材が使われています。(スライド38)

また、不言亭の周りには、来歴不明の石が数多く置かれています。(スライド39) 入り口の「不言亭」という石碑は、柳町時代の校内のせせらぎに架けられていた石橋であると裏の銘文に刻まれており、柳町から移設されたことがわかります。その他にも、飛び石、蹲、茶道具が刻まれた灯籠(京都の善導寺型)、沓脱石、船着石などがあり、これらの中にも柳町から移設されてきたものがあるだろうと予想されます。(スライド40~46) 茶道具が刻まれた灯籠は、花蹊の茶人としての趣味が反映された遺物だろうと思われます。(スライド43)

不言亭周辺の石造物



飛び石群
瀬戸内花崗岩



蹲 (つくばい)
丹沢七沢石 (凝灰角礫岩)
地藏尊削り出し

40

不言亭周辺の石造物



蹲
丹沢七沢石 (凝灰角礫岩)
地藏尊削り出し



蹲
京都鞍馬石 (石英閃緑岩)



蹲
京都鞍馬石 (石英閃緑岩)

41

不言亭周辺の石造物



燭台か。
丹沢七沢石 (凝灰角礫岩)
六地藏削り出し



石祠
安山岩 (屋根は箱根)

42

不言亭周辺の石造物



灯籠 (善導寺型)
瀬戸内 花崗岩



炭籠 (炭取)



三徳



鉄瓶

43

不言亭周辺の景石



沓脱石
瀬戸内 花崗岩



景石
頁岩 表面焼け



景石
礫岩

44

不言亭周辺の景石



南から



北から

船着石か
瀬戸内 花崗岩

45

今回の発表を契機に、不言亭と景石群について改めて多くの方々に注目していただき、この文化遺産を過去から未来へと繋げていっていただきたいと考えています。

ご清聴ありがとうございました。

不言亭周辺の景石



跡見学園女子大学花塚記念資料館蔵



赤丸部分の拡大

この石は...

これか...?

46

報告② 「柳町時代の跡見女学校の建物について」

テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部
渡辺 恵未

テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部の渡辺恵未と申します。私の方からは、柳町時代の跡見女学校の建物についてお話したいと思います。

改めてですが、跡見女学校の変遷を見ていきたいと思っています。跡見花蹊は大阪で生まれ、その地で塾を開いていた父に代わって経営を引き継ぎ、独力で女子教育に着手していきます。その後、東京に移住し、教育の現場は神田から柳町、そして大塚へと移っていきます。教育の現場が移り変わるとともに、建物の様相も変化していきます。柳町時代には、生徒数の増加に伴って大きく一度建て替えが行われています。柳町第1地点ではこの時代の2つの建物跡が確認されています。(スライド2)

では、どのように調査内容から跡見女学校の建物跡と判断したのかを説明していきたいと思っています。

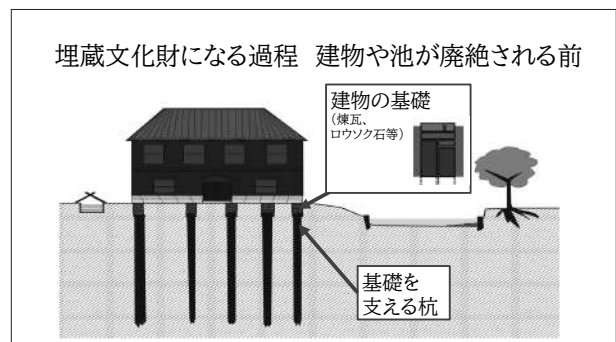
まず始めに、跡見女学校の建物が埋蔵文化財(遺跡)になるとは、どのようなことかを見ていきます。

例えばスライド3のように当時の跡見女学校が建っていたとします。建物の下にあるこの長いものは杭で、その上に建物の基礎となる煉瓦や、ロウソク石等が置かれています。これで軟弱地盤に建物が沈み込まないようにしています。その後、土地利用の仕方が変わり、地上の建物が壊され、池の水や木も抜かれました。すると、地面には建物の基礎や池、木が植えられていた跡などが残されます。そこに新しく建物を建てる等するために、盛土が行われました。この過程が、跡見女学校が埋蔵文化財(遺跡)になる経緯です。そして、現代の私たちが過去の建物基礎や池跡など、人が生活していた跡(生活痕跡)を検出し、遺構として記録していきます。これを発掘調査といいます。以上の点から、発掘調査で出てくるものは主に建物の基礎

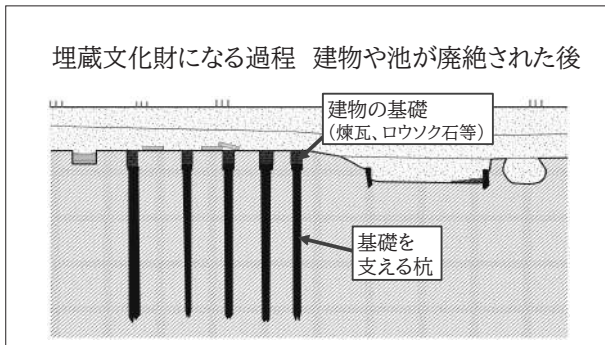


明治16(1875)年	跡見女学校 (現在の千代田区西 新橋1丁目に開校)	明治21年	明治21年 大正2年 建築
		九月六日 「学校日々主を遷、惣てなし、遷出来、主堂日に二百廿つ、地盤に於て也。」	
明治20(1887)年		九月九日 「新築の上様式。」	
		十一月三日 「新築の上様式執行。(千代田)」	
明治21(1888)年	小石川橋本 (現在の文京区小石 川1丁目)に移転		
昭和8(1933)年	小石川大塚町 (現在の文京区大塚) へ移転		
令和7(2025)年 現在			

2



3



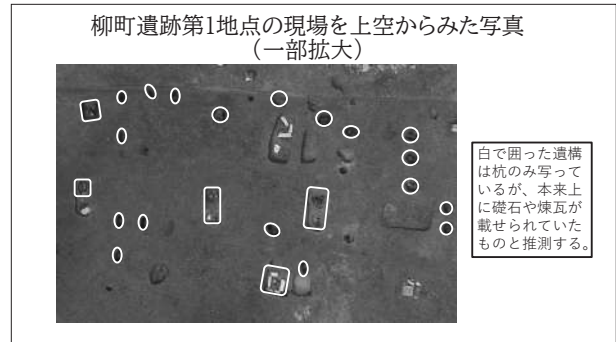
4



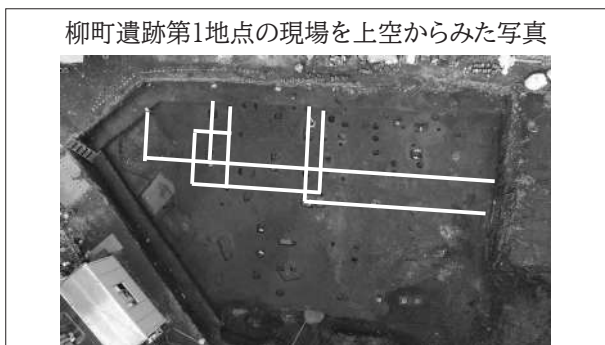
5



6



7



8

部分となります。(スライド3・4)

スライド5は実際に第1地点の現場を上空から見た写真です。白い線で囲った部分が調査した北西部分になります。円形や四角形に見えるものが遺構と呼ばれるものになります。(スライド5)

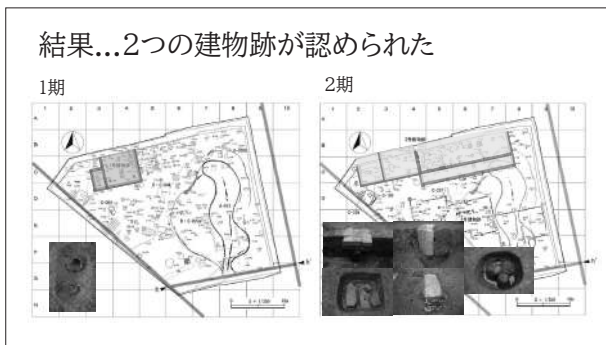
今回発掘された建物の基礎には複数の種類の構造が認められます。最初に紹介した煉瓦でできた基礎の他に、杭の上にロウソク石と呼ばれる縦に長い石を置いたものや、モルタルの基礎、礎石を

配置したものがあります。ロウソク石を基礎として使う工法は、江戸時代から使われています。跡見女学校以外にも旧東京医学校の建物基礎にも使用されていたことが明らかになっています。また、基礎石等を支える杭にも種類があり、2本で組まれた杭と3本で組まれた杭が認められました。(スライド6)

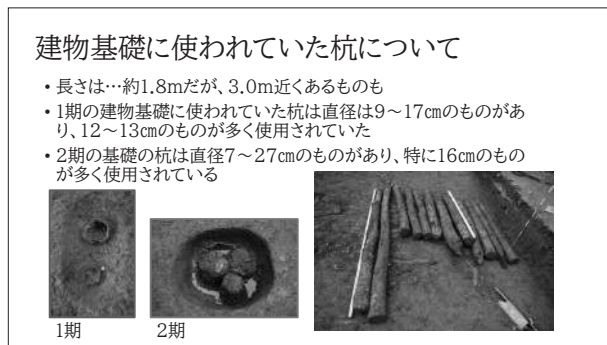
では、建物の基礎を確認したところで、もう一度現場の写真を見ていきます。先ほどお見せした上空からの写真を拡大したものになります。この範囲だけでも様々な建物基礎があることが分かります。杭のみが検出されたものもありますが、本来礎石が載せられていたと推測されます。(スライド7)

一見バラバラに配置されているように見える建物基礎(遺構)ですが、建物の場合、規則性を持って基礎が配置されます。例えば、遺構(基礎)の並びを観察すると、直線上に並んだり、同じ間隔で配置されます。すると、その直線が同じ向きで並行したり、直角に交わるのが見えてきます。加えて、同じ構造の基礎や杭の種類などを考慮して細かく観察すると、このようにいくつかのラインが見えてきます。(スライド8)

スライド9は調査した全体図になります。最終的にこのように建物基礎のラインを引くことができ、建物は1つではなく2つあることが判明しました。スライド9の左図にある建物は、2本組の杭が南北に配置されたものが多く使用されていました。対して右図の建物は、3本組の杭が多く使用され、他に礎石やロ



9



10



11

ウソク石、煉瓦、モルタルが遺されていました。また、杭の本数で建物の時期が異なる印象を受けました。跡見女学校の校舎における基礎杭の特徴として、長さは概ね1.8mで、長いもので3m近くありました。全て同じ規格の杭が使用されているのではなく、スライド10に記載したように時期によって大きさの異なる杭が使用されていました。

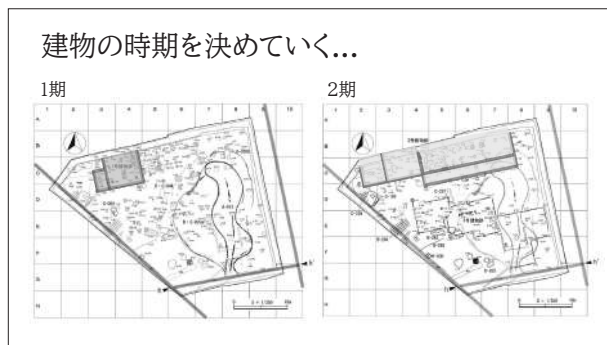
では皆様、この杭はどのように打ち込んだと思いますか？(スライド9・10)

スライド11は大正6年(1917)の利根川改修工事写真です。この写真の両側にいる人たちで、真ん中にある錘を持ち上げ、それを落として杭を地中に打ち込んでいきます。よく見ると、錘は大勢の女性が引張りあげていることが分かります。このように基礎杭を打ち込む工事は軟弱な地盤の上に建物を建てる際に行われます。現代では杭を打つ機械があり、鋼やコンクリートの杭を使用して地下の硬い地盤まで杭を打ち込んで基礎を作り、建物を安定して建築できるようにします。大正14年(1925)の学校建築法でも木杭打ちが認められており、現代でも使われ続けていることが分かります。(スライド11)

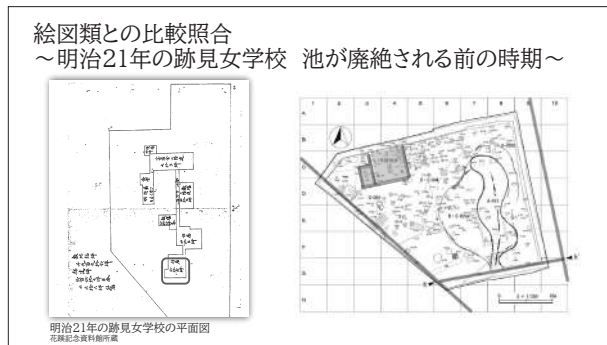
このような工法を使って建てられた2つの建物ですが、この建物が何か、いつの時代のものかを特定するために、最後に文献や絵図類とも比較していきます。(スライド12)

スライド13の左図が明治21年(1888)、池があった時期の跡見女学校の平面図になります。線で囲った部分が第1地点の調査区にかかる建物だと考えられることから、右図のトーンをかけた建物は「住居」部分であると推定できます。(スライド13)

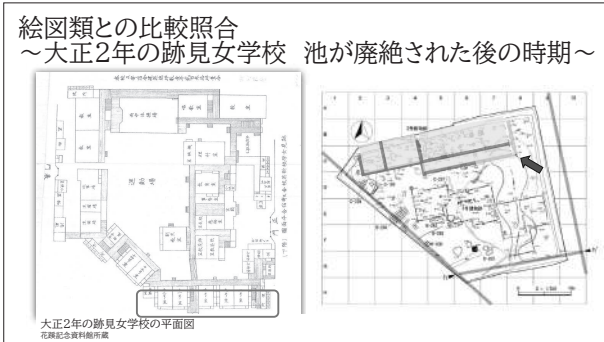
もうひとつの建物も比較してみます。スライド14の左図が大正2年(1913)の跡見女学校の平面図になります。先ほど同様、線で囲った部分が調査区にかかる建物だと考えられることから、右図のトーンをかけた建物は「寄宿舎」であると推定できます。調査成果で注目されるポイントとしては、矢印で示した部分です。この部分は池の上に建物の基礎が被っている部分にあたり、ここだけモルタルの基礎が用いられてい



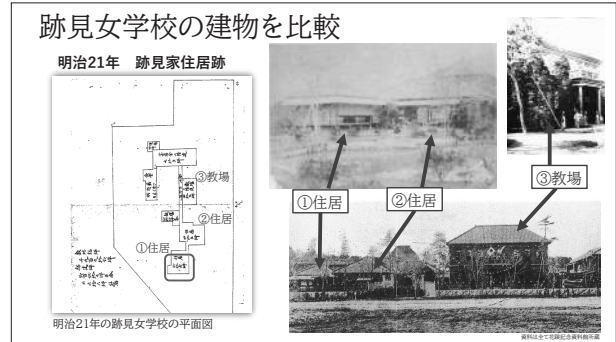
12



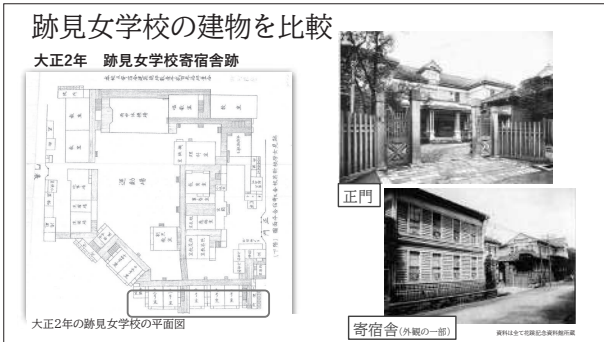
13



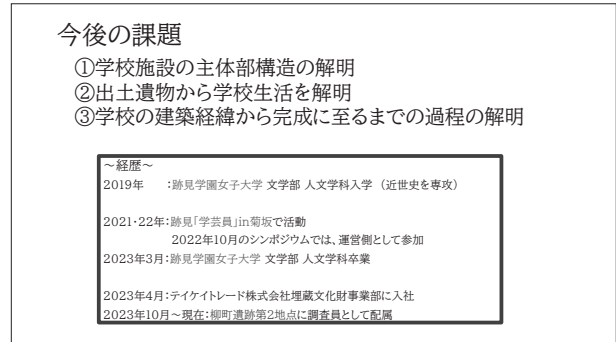
14



15



16



17

ました。この付近は池の埋め土で地盤が弱く、強度を持たせるためにモルタルの基礎を使用したのだと考えられます。花蹊日記から池を埋めて新しい寄宿舎を建てたと読み取れる記述がありますので、この建物は
大正2年(1913)の寄宿舎だと判断しました。(スライド14)

さらに写真とも比較していきます。スライド15の右の写真は明治21年(1888)のものですが、この写真を見ると調査範囲にかかっていた建物(①住居)は木造平屋であったことがわかります。そのため、建物基礎を支える杭の本数が2本でも建物の重さに耐えることができたと考えています。(スライド15)

対して、池を埋め立てて建てられた大正2年(1913)の跡見女学校の建物は、スライド16の右の写真のような2階建ての寄宿舎であり、木造平屋よりも重量のある建物でした。そのため、建物基礎には基礎石、煉瓦やモルタルといった強固な素材が使われていたと考えられます。つまり、建物の形態によって建物基礎の構造が異なっていたと考えられます。(スライド16)

ここまで考古学の視点で跡見女学校を見てきましたが、私が現在行っている第2地点の分析や検討も同じような内容になります。私は本学在学中に令和4年(2022)のシンポジウムなどに参加させていただき、本学卒業後にテイケイトレード株式会社に入社。その後、跡見女学校跡地を含む柳町遺跡第2地点の調査をしています。学校建築が発掘調査対象であることを知らなかった方もいらっしゃるかと思います。私自身もこのような発掘調査に携わるまで、その様な発想はありませんでした。(スライド17)

今回の発表のように、発掘調査と文献調査の双方の成果から、より具体的な学校史を語るができるのではないのでしょうか。土地利用の視点から見ていくと、地域史にも繋がっていきますので、ぜひ皆様にも調査成果をご活用いただければと思います。

今後の課題としましては、第1地点の調査成果に加え、第2地点の調査ではより広い範囲を発掘調査しましたので、学校の構造がより詳しく解明できるのではないかと思います。また、同時に出土した遺物からも、当時の学校生活が見えてくるのではないのでしょうか。これらの発掘調査と文献調査の成果から、学校の建築経緯やその完成に至るまでの過程の解明に繋げていきたいと思っております。(スライド17)

皆様、ご清聴ありがとうございました。

報告③

「〈跡見「学芸員」in菊坂〉が読み解く柳町周辺の様子」

跡見学園女子大学大学院人文科学研究科
黒木 真悠

ただいまご紹介に預かりました、跡見学園女子大学大学院人文科学研究科1年の黒木と申します。本日は、「〈跡見「学芸員」in菊坂〉が読み解く柳町周辺の様子」という題で、お話ししたいと思います。現代の跡見生による資料調査の様子について知っていただければ幸いです。

まず、跡見「学芸員」in菊坂という団体についてご紹介します。これは、旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）を拠点として、跡見学園女子大学の学生が活動している団体です。主な活動として、年1回の企画展示、旧伊勢屋質店を災害から守る防災活動、地域交流活動、そして旧伊勢屋質店に残されている質物台帳や民具の調査などを行っています。旧伊勢屋質店は、樋口一葉が通っていたことでも有名です。本日はこの中から、質物台帳の調査報告についてご報告いたします。



まず質物台帳とは、質屋での貸契約の年月日や質物の品目、物品の特徴や質置生の記録などが書かれた帳簿です。質屋営業法で記帳が義務付けられており、法律上の保管義務は3年間です。現在旧伊勢屋質店に残されている台帳は、今写しているものです。旧伊勢屋質店には、この台帳も含め、本店と柳町支店合わせて17冊の質物台帳が残されており、これは本日展示しております。

柳町支店は、小石川区柳町24番地（現在の文京区小石川1丁目）にあった伊勢屋質店の支店です。1932年（昭和7年）に開業しましたが、1945年（昭和20年）3月9日に戦時体制の影響により「建物疎開」の対象になり、廃業したため、現存していません。学生が報告している台帳も、この柳町支店のものになります。

私たちは、台帳の調査にあたり「台帳プロジェクト」を立ち上げました。2023年度から跡見「学芸員」in菊坂に所属する全ての学生が参加しております。現在、1937年11月9日から1938年4月7日までの翻刻を終えています。これらの翻刻データをまとめた書籍が今年度刊行され、パンフレットのQRコードからアクセス可能です。この研究成果に基づき、2023年と2024年度には特別企画展を開催しました。

では調査結果について触れたいと思います。まず利用者の地域分布についてです。

調査期間中（1937年11月9日～1938年1月16日）の柳町支店の利用者を見ると、旧小石川区と旧本郷区の利用者が大多数を占めていました。このことから、質物台帳から読み取れる情報は、柳町支店の近隣に住む人々の様子、つまり当時の柳町周辺の様子を反映していると言えます。

また、質入れ品の総数は1,780点で、そのうち、和服と分類される羽織や単物が6割を占めていました。この結果に基づき、当時の柳町周辺では和装の人が多く、洋装の人は珍しかったのではないかと推測されます。

本日は女学生をテーマとしたシンポジウムなので、ここで女学生と着物に関する話もしたいと思います。質物台帳には、着物の生地や色などが細かく記載されていました。これは、受け戻しの際の間違いを防ぐためだと推測されます。特に台帳に多く記載されていた「メリンス」と「名仙」について、女学生との関わりが判明しました。

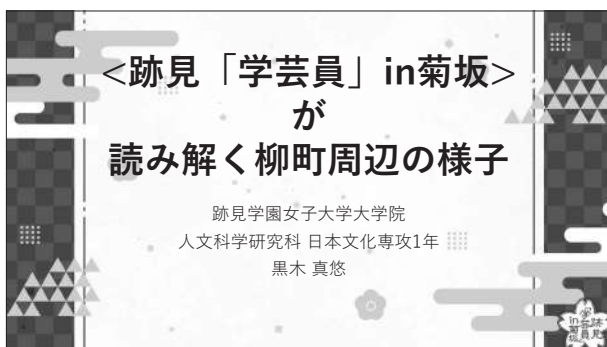
まずメリンス（モスリン）についてご紹介いたします。これは腰紐と長襦袢地に使われていたものと推測されます。幕末明治に輸入され、明治後半からモスリンと呼ばれるようになりました。1915年（大正4年）11月6日の読売新聞の記事には、「跡見の制服一定」として、生徒の襟はメリンスを程度とし、教師の服装地質はメリンスとしたとあります。このことから、跡見女学校では生徒も教師もメリンスの衣服を着用していたのではないかと推測されます。

次に銘仙^{めいせん}についてご紹介いたします。大正から昭和にかけて庶民の着物の主流となり、カラフルで大胆な柄が特徴でした。銘仙と女学生のエピソードとして、学習院女学部の規定が挙げられます。1907年（明治40年）に制定されたこの規定では、華美であった学生の服装を抑えるため、衣服の着質を銘仙以下にすることが定められました。当時の銘仙は地味なものでしたが、この規制に対し、華やかな服装を望んだ女学生の様子を聞き、呉服屋が工夫して作ったのが模様銘仙であると言われています。

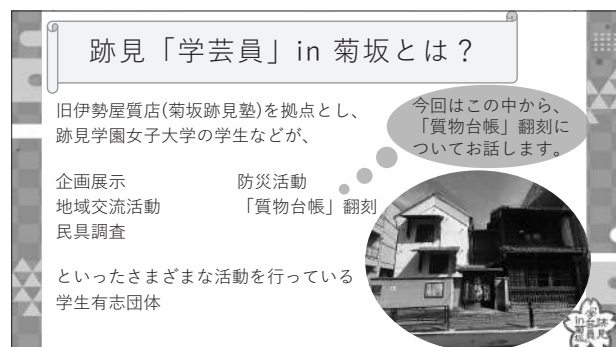
ここまでの話をまとめさせていただきたいと思います。跡見「学芸員」in菊坂に所属する学生は、旧伊勢屋質店を拠点に活動を続けており、質物台帳からは、当時の服装、物価、利用者の分布など、多くの情報を知ることができます。台帳には女学生につながるヒントもあり、現代の女子学生によって、昭和の女学生像が具体的に明らかになっていく可能性があります。

跡見「学芸員」in菊坂は、学生によってこれからも継続される予定であり、今後も企画展などを通じて活動成果を発信していく予定です。ぜひ私たちの活動に関心を持っていただき、企画展や旧伊勢屋質店に足を運んでいただくと幸いです。

以上で私の話を終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。




1



2

「質物台帳」から見た柳町の様子

「質物台帳」とは？
 [質契約の年月日] [質物の品名] [特徴]
 [質置主の情報]などが記録された帳簿。盗品などが売買されていないかを確認するうえでも、重要な書類であり、質屋営業法で記帳が義務付けられ、法律上の保管義務は3年間と定められていた。



現在、旧伊勢屋質店には本店、柳町支店を含め17冊の質物台帳が残されている。

本日展示中!

1 奈良女子大学地域交流センター編集、発行「旧伊勢屋質店 質物台帳 総覧データ集」2025

3

「質物台帳」から見た柳町の様子 伊勢屋質店柳町支店とは？

小石川区柳町24番地(現・文京区小石川1丁目)にあった伊勢屋質店の支店。

1932(昭和7)年に開業し、1945(昭和20)年3月9日に戦時体制の影響を受け、「建物疎開」の対象となり廃業。

現在、跡見「学芸員」in菊坂の学生が翻刻している「質物台帳」も伊勢屋質店柳町支店の「質物台帳」。

本日展示中!

1 金子洋之、「伊勢屋質店の生活史—暮らしよりから建物の保存まで」、『奈良女子大学地域交流センター年報第5巻』2020

4


「質物台帳」から見た柳町の様子 「台帳プロジェクト」の台帳調査

2023年度から跡見「学芸員」in菊坂に所属する学生が「台帳プロジェクト」を立ち上げ、調査を開始した。

現在、1937年(昭和12)11月9日～1938年(昭和13)4月7日の翻刻を終えている。

2025年に今までの翻刻データをまとめた『旧伊勢屋質店 質物データ集』を刊行しました!

配布のパンフレットよりアクセスできます!



本日展示中!

1 奈良女子大学地域交流センター編集、発行「旧伊勢屋質店 質物台帳 総覧データ集」2025


5

「質物台帳」から見た柳町の様子 「質物台帳」の研究成果

「質物台帳」の翻刻の成果として

- ★2023年度特別企画展
「質屋の記録 ～見えてくる昭和初期の暮らし～」
- ★2024年度特別企画展
「質屋と女性 ～一葉も通った伊勢屋質店～」

を開催。



配布のパンフレットよりアクセスできます!

本日展示中!

1 金子洋之、「伊勢屋質店の生活史—暮らしよりから建物の保存まで」、『奈良女子大学地域交流センター年報第5巻』2020


6

「質物台帳」から見た柳町の様子 伊勢屋質店柳町支店の利用者

柳町支店の地域別利用者

地域	件数
旧小石川区と旧本郷区	624件
上記以外のエリア	73件
不明	60件
無記載	184件
合計	941件

1937(昭和12)年11月9日～1938年(昭和13)1月16日



✓利用者の多くは柳町支店の近隣の人であり、柳町支店の「質物台帳」から読み取った情報は柳町の様子と言えるだろう。

本日展示中!


1 奈良女子大学地域交流センター編集、発行「質屋の記録—見えてくる昭和初期の暮らし—」2024

7

「質物台帳」から見た柳町の様子 質入れ品(質物)の内訳

1937(昭和12)年11月9日～1938年(昭和13)1月16日

質入れ品の総数1780点のうち、羽織や単物など、和服が6割を占めており、当時の人々は和服を主に着用していたと考えられる。



✓したがって、この時代の柳町周辺は、和装の人の方が多く、洋装の人は珍しかったのかもしれない。

本日展示中!

1 奈良女子大学地域交流センター編集、発行「質屋の記録—見えてくる昭和初期の暮らし—」2024

8

「質物台帳」と女学生の着物

質物台帳には、質入れされた着物の生地や柄、色など細かく記載されている。

- ① メリンス紺白立縞小緋 (1937年(昭和12)11月14日5026番)
- ② 名仙紺茶立縞 (1937年(昭和12)11月9日4957番),

「メリンス」、「名仙」は質物台帳に多く書かれ、また跡見やその他の女学校・女学生と関わってきた。


本日展示中!

1 奈良女子大学地域交流センター編集、発行「旧伊勢屋質店 質物台帳 総覧データ集」2025

9

「質物台帳」と着物 メリンスとは？

布地は幕末、明治時代に輸入され、和服として需要が拡大、国産化され、国外にも輸出されるようになった。はじめメリンスと呼ばれていたが、明治時代後半からモスリンと呼ばれるようになった。



モスリンは、着物では、腰紐と長襦袢地に用いられる。

本日展示中!

1 「モスリン」日本国語大辞典, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com/atom/sim/ocic.org/, (参照 2025/09/26)
2 奈良女子大学地域交流センター編集、発行「質屋の記録—見えてくる昭和初期の暮らし—」2024


10

④ 「質物台帳」と着物
跡見女学校と着物

1915年(大正4)11月6日読売新聞の朝刊記事(抜粋)

跡見女学校の生徒服装一定
「地質は木綿の紫紺地(中略)生徒の襟はメリンスを程度として、/又教師の服装(中略)地質はメリンスと致しました。」

✓跡見女学校では、生徒も教師もメリンスの衣服を着用していた。




1 【朝日新聞】 跡見女学校の生徒服装一定 朝日新聞の記者に木綿の紫紺地に襟を紫紺、1915/11/6、ヨミオシ、<https://yomiuri.com.br/di-oo.jp.atom?idm.ochi.or.jp/yomiuri/mst/ent/cha/1911731>、(伊賀：2025/09/20)
2 尾形宗太郎著『跡見女学校の歴史』1989、尾形宗太郎著『跡見女学校の歴史』1989、尾形宗太郎著『跡見女学校の歴史』1989

11

④ 「質物台帳」と着物
銘仙とは??

大正から昭和にかけて、庶民の着物の主流ともなっていた「平織りの絹織物」。おもに関東の伊勢崎、足利、秩父、八王子など養蚕地域で生産された。絣の技法を用いたカラフルで大胆な柄行きが特徴。「東の銘仙、西の御召」といわれるほど流行した。



台帳上では、「名仙」と記載してある。

1 尾形宗太郎著『着物にまつわる言葉をイラストと認知図で読み解く』きもの図解館 2021、誠文堂新光社
2 尾形宗太郎著『尾形宗太郎の「銘仙」(おいせん)』<https://www.oshikata.or.jp/news/2023/08/26/139507.html> (2025/08/26)

12

④ 「質物台帳」と着物
銘仙と女学生

学習院女学部の規定 1907年(明治40)7月10日制定
「一、衣服ノ地質ハ(和服・洋服トモ)綿布・麻布・毛布・紬・銘仙及ヒ交織ノ類ニ止ム」。

この時期の学習院女学部…
院長→乃木希典 質実剛健、それまで華美だった学生の服装を銘仙以下にすると定める。この当時の銘仙は縞や絣の地味なもの
⇒それまで華やかな服装で登校していた女学生の様子を聞いた呉服屋が伊勢崎の機屋と研究して作ったのが模様銘仙。

1 女子学芸員編『女子学芸員五十年史』1975、女子学芸員 国立国会図書館デジタルコレクション<https://dl.ndl.go.jp/id/1465912/2025/08/28/2898>
2 尾形宗太郎著『尾形宗太郎の銘仙』1989、尾形宗太郎著『尾形宗太郎の銘仙』1989、尾形宗太郎著『尾形宗太郎の銘仙』1989

13

④ まとめ

- ✳️ 跡見「学芸員」in菊坂に参加する学生は、旧伊勢屋質店(菊坂跡見塾)を拠点に、企画展示や所蔵品の調査を行なっている。
- ✳️ 伊勢屋質店の「質物台帳」には当時の服装や物価、来店者の分布など多くのことを知ることができ、この調査は学生によってこれからも続けていく予定。
- ✳️ 「質物台帳」には女学生につながるヒントもあった。現代の女子学生によって、昭和の女学生像が明らかになっていくかも。

1 女子学芸員編『女子学芸員五十年史』1975、女子学芸員 国立国会図書館デジタルコレクション<https://dl.ndl.go.jp/id/1465912/2025/08/28/2898>
2 尾形宗太郎著『尾形宗太郎の銘仙』1989、尾形宗太郎著『尾形宗太郎の銘仙』1989、尾形宗太郎著『尾形宗太郎の銘仙』1989

14

質疑応答

[進行 (栗生)] はい、それでは、質疑応答の時間に移りたいと思います。早速ですが、会場の皆様から
もご質問を受けながら、活発な意見交換の場としたいと考えております。ご質問のある方は、ぜひ挙手
をお願いいたします。

[質問者A] 川切りの質問をしなければと思い手を上げました。私は去年まで跡見学園女子大学で兼任講
師をしていました。今日大変貴重な話を聞き、実は私の職場は跡見学園創業の地である西神田2丁目の
近くにあります。近辺を歩いていると、いろんな大学がこの地で創設したという案内板が目につくのです
が、西神田2丁目の跡見学園の創業の場所（今は駐車場になっています）には、「日本で初めての私学
の女学校ができた地」という案内板が設置されていません。今日のお話でいう歴史的な価値のある場所
なので、柳町だけでなく、ぜひ創業の地にも、跡見学園がここでできたというような碑があった方が良
いのではないかと、いつも思っています。その辺りのところをぜひお伺いしたいと思います。

[土居 (地域交流センター長)] ありがとうございます。跡見の地域交流センター長をしております、土居
と申します。ご指摘、誠にありがとうございました。そうなんです、創業の場所には碑がないんですよ
ね。しかも柳町の校舎の土地も今、「跡見学園の跡地です」という表示は特にありません。ただ、柳町
の方については、小学校の建て替えが終わった後に、看板を設置していただくということで区と調整が
ついています。令和10年度ぐらいに設置される予定です。もちろん、西神田の方も、交渉はこれからに
なりますが、我々としては何とか設置をしたいと考えているところがあります。ただ、まだなかなかその実
現に至っていません。どうもありがとうございました。

[司会 (栗生氏)] ありがとうございます。他に、ご質問のある方、または感想でも構いませんので、ぜひ
お願いいたします。

[質問者B] 今日は貴重な講演あり
がありがとうございます。校歌で気になっ
たのが一つあったのですが、作曲
者の方の苗字を見ると多野さんとい
う名前で、その方は多分学区内の
学部の先生だと思うのですが、例
えば花蹊先生と多野さんの関係や、
依頼した経緯のような話があったら
いいなと思いました。この場です
ぐに答えではないと思いますが、そ
ういったことがそのうち分かたら
いいなと思います。

[若林職員] ありがとうございます。



詳細な経緯につきましては、現時点ですぐにご説明できず恐縮ですが、^{おおのひさつね}多久毎先生は当時、跡見女学校で音楽の教鞭を取っておられた方です。校歌「花桜」の作詞は、当時国語を担当されていた大和田建樹先生によるもので、花蹊先生の精神が今日まで語り継がれ、形として残っていることに深い感銘を受けました。どういった経緯で依頼されたかということも、今後勉強させていただきたいと思います。ありがとうございました。

[司会 (栗生)] はい、ありがとうございます。他にございますでしょうか。少し登壇の皆様にお話を伺おうかと思えます。今日、石神先生が「過去、現在を繋ぐ媒体ではないか」とお話しくださいましたが、皆様それぞれ他の発表を今日初めて聞かれたと思うので、何か感想などいただければと思います。

[小関先生] ありがとうございます。本当に他の皆様方の発表を聞くのは私も今回初めてで、特に、実際にどうやって遺構から建物を見つけていくのかという具体的な話は大変勉強になりました。それと、跡見女学校が文京区に来たのは柳町校舎からで、その前は千代田区神田だったというイメージが先行していたのですが、今回掲示されているパネルの地図を見て、ものすごく近い距離で移動しているということが視覚的に表現されていて、具体的なイメージがつかまりました。パネルの準備をされた方々のその成果も含めて、大変勉強になることが多かったです。

[若林職員] テイケイトレード様(小野氏、渡辺氏)や石神先生のお話を伺い、これまで漠然と「想像する楽しさ」として捉えていた作業が、実際には多くの手間と時間を要する地道な積み重ねの上に成り立っていることを理解し、大変勉強になりました。私自身も、今回小関先生のご指導のもと資料を読み直す過程を通じて、その地道さと同時に意義深さ、おもしろさを実感する、非常に有意義な活動となりました。今後も、このような一次資料に直接触れる機会を大切にしていきたいと考えています。

[小野様] 私も皆さんの発表を聞くのはもちろん初めてでしたが、我々遺跡の発掘の仕事は、生のものを良くも悪くもそのままさらけ出す仕事ですので、例えるなら「歴史の医者みたいなものだ」と思っています。皆さんの発表にもあったように、我々が出てきた遺構や遺物という生のものから、そして小関先生たちが音というもの(校歌)から、文字面だけでは分からないリアルな空気感や生活感を、歴史上の人物や風景に肉付けしていったのは非常に面白い作業でした。これからも色々そうした試みをして、皆様に還元していければと思っています。

[渡辺様] 私は本学を卒業しましたが、在学中に校歌に触れる機会があまりなかったので、今回校歌に触れて学生時代にもっと勉強しておけばよかったという後悔も感じつつ、新しい発見があり面白かったです。また、第1地点調査時に、花蹊記念資料館のご協力で跡見女学校の写真をいくつか提供していただきましたが、当時自分たちでは発見できなかった資料を今回のシンポジウムでいくつか拝見できました。花蹊記念資料館の引き続きのご協力を得つつ、我々の今後の調査にも生かしていきたいと思っています。また、在学中は黒木さんと同じ団体(跡見「学芸員」in 菊坂)で活動していましたが、活動規模がどんどん大きくなっており、本日取材が来ていたことから、活発になっていることが分かります。跡見が持っている文化財を、もっと広く活用していただければと思います。

[黒木さん] 私は今日、跡見の「昔」というよりは「未来に繋がる話」という視点で担当させていただいたのですが、皆さんが発掘してくる遺構を見つける作業についても学ぶことができ、それも今後生かしていきたいと思いました。私たち学生にとって貴重な機会なので、大切にしていきたいですし、この活動をまた後世に伝えていければと思っています。ありがとうございました。

[司会 (栗生)] ありがとうございます。登壇者の方々の感想を踏まえ、またご質問がありましたら、ぜひ会場の方からいただきたいなと思います。

[質問者C] 本日は大変ありがとうございました。私も先ほどの方と同じように、非常勤講師として新座の方で7年間勤めており、今年で終わりになります。今日は記念に初めて文京区の本学のところを見たいと思って来ました。大変参考になったのですが、やっぱり新座キャンパスの方が広くていいなと正直

思いました。私は観光コミュニティ学部の「むさしの学」という授業を担当し、新座市辺りの地理や歴史を扱ってきましたが、新座市は武蔵野台地、湧水がメインだと考えていました。しかし、新座キャンパスが、新座市が発掘した古代遺跡（縄文・古墳時代）の場所に着発されて建設されたという経緯も知り、非常に興味深い場所だと認識しました。広々としたキャンパス、花蹊記念資料館、そして今日初めて不言亭の由来をしっかりと学びました。このような興味深い場所であるにもかかわらず、学生が「そこに歴史がある」ということにあまり気付いていないのではないかと感じ、とても惜しい気がしました。新座の歴史的な特徴（乗り込み要水など）と、こちら（文京区）の歴史的な特徴を比較し、両者の関係をもっと知っていただきたいと感じました。

[質問者D] 私はテイケイトレード株式会社のもので、ただいま第2次調査に関わっております。実は第2次調査では、跡見学園の建築経緯や数種類の基礎について、大変興味深い建築過程が分かってきています。また、その下から旗本屋敷の様々な遺構や遺物が出土しており、これらは近代の歴史に大きく変更を迫るぐらいの価値があると思っています。現在調査中ですので細かくは言えませんが、大体2年後に報告書が刊行される予定になっています。できることならまた皆さんこの場でその成果を披露できればと思っています。

[小野様] 今のは上司でして、もし跡見学園様から2回目の機会をいただけるのであれば、また一次調査の話の練り直さなければならぬのですが、ネタはいくらでもございます。ぜひまた機会をいただきましたら、よろしくお願いたします。

[司会(栗生)] ありがとうございます。ご質問ございませんでしょうか。

[質問者E] 質問というかお伺いなのですが、先ほど見せていただいた先生の晩年の笑顔の写真がすごく素敵でした。今まで見る写真は、真面目そうなオフィシャルな表情のものばかりだったので、その写真は今普通にダウンロードできたりするのでしょうか。

[小関先生] あれも『汲泉』（校友会会誌の機関誌）の中にございます。何年の何月号だったか、もう少しお時間ください。あれは時代的に「ニコニコ写真」という時代で、有名人をわざと笑わせて満面の笑顔で撮るといふ写真家たちがおり、そのニコニコ写真です。時代の一つの象徴であり、普段笑わない先生をその写真家たちが撮影したもので、『汲泉』に掲載されています。調べてお伝えします。（後の調査で、大正5年6月30日発行の『汲泉』第47号であることが分かった。）

[司会(栗生)] ありがとうございます。他にございますでしょうか。そろそろお時間ですので、質疑応答はこのぐらいにしておこうと思います。小関先生からお話があったように、まだまだやれることがたくさんありそうです。文京区が持っている相当な量の出土品がまだ公開されていない状況です。花蹊記念資料館にもたくさんの資料があります。また何か機会があればと思います。ありがとうございました。



閉会あいさつ

跡見学園女子大学地域交流センター長
土居 洋平

跡見学園女子大学地域交流センター長の土居洋平と申します。本日は、大変多くの方にいらしていただき、また、登壇者の皆様には大変有意義なお話をいただき、誠にありがとうございました。大変良いシンポジウムにできたと実感しております。皆様も楽しんでいただけたでしょうか。

さて、今回は「文化遺産が繋ぐ過去と未来」というテーマで実施させていただきましたが、やはりこういうものは定期的にやる必要があるかと思いました。文化遺産が過去と未来にどう繋がるか考えていくこと、これそのものが、過去未来に繋ぐ一つの実践であり、試みだと感じています。今回、本日のシンポジウムに向けて、様々な方に本学の歴史を調べていただき、まとめたいただき、ここで伝えていただきました。まさに、このことが繋いでいくことであり、過去を未来に繋いでいくことになるのだろうと考えながら、お話を伺っておりました。「次回もやってほしい」という話が先ほどありましたが、本当にありがたいことです。2年後に新しい報告書が出た暁には、またこういうことを企画していければと思っております。

私自身にとりましても、今回も本当にたくさんの学びがありました。例えば、校歌の話も、メロディを聞いて歌っていただくことで、当時在校生や卒業生が歌っていた情景が、なんとなく後ろの方で聞こえてくるような錯覚に陥りました。また、不言亭の話も印象的でした。もちろん本学が柳町から大塚、そして新座へ移転したという知識はありましたが、今日に備え、昨日の新座での授業の前に、不言亭を見てきました。校舎の前のベンチの近くの何気ないところに石が置いてあったりして、明日の話に出てくる石は「これだ」と思いました。しかし、それを知らないと、単にそこにある石のように思われてしまいます。そうならないように、「これはそういったものだったのだ」歴史として語り継いでいく。新座キャンパスの学生にも「身近なところに歴史があるんだ」と、ちゃんと伝えていかなければならないという思いを新たにいたしました。

大変多くの気づきを得て、ご縁も色々と確認させていただきました。本日、3年前にシンポジウムをした時よりも倍ぐらいの方にいらっしゃっていただいています。このテーマは本当に広がりがあるので、定期的にこれからも続けていこうと思っております。次回この企画を立てた際には、またぜひこちらにご覧いただければと思っております。皆さん、本当に今日はどうもありがとうございました。これをもちまして、本日のシンポジウムを閉会とさせていただきます。どうもありがとうございました。



シンポジウム参加者へのアンケート結果

シンポジウム参加者へのアンケート結果を紹介します。

- 柳町校舎の生活様子、特に大池でのイベントのお話が興味深く、当時も楽しく学園生活をしていたことがよくわかりました。池からみつかったおもちゃは跡見生なら持ってるかもしれないと思いました。
- 多角的な視点が面白い
- 様々な立場の方からの話を聞くことができ、有意義なシンポジウムだった。
- 専門家による話に加え、卒業生、院生による報告があるのがよかった。
次回のシンポジウムも楽しみにしています。
- 自分が学んだ学校の歴史について改めて知ることばかりで当時もっと知っていたらと後悔することばかりです。新座キャンパスに通っていたため、文京キャンパスのことについてほとんど知らず今回お話を聞くことができるとてもよかった。今更ではありますが、これからも興味をもっていきたいと思うと同時に、これだけの歴史ある学校の卒業生であることが誇らしく跡見学園が末永く続いてほしいと心から願います。今後もこのような企画をお願いします！
- 日頃、進駐軍に接収された住宅の変遷を調べております。
出土遺物と文献をすり合わせる実際例を様々な角度で提示いただき、とても参考になりました。
- チラシをいろいろな大学等に置いてください。
- 現柳町小学校周辺に校舎があったことを知り、柳町時代の女学校のイメージをもつことができた。元旗本邸の跡には驚きました。
- 卒業生なので学校のこと（柳町時代）を知る機会となった。
- 休憩は報告1と2の間にほしかった。
- 黒木さんの発表が面白かった。質店の質ぐさの中身に今日一番興味を持ちました。
銘仙とお召の違いを初めて知りました。こういうことは昔は常識でも今は知らないのが当たり前になっています。
- とても具体的でよく理解できた。
- 跡見が柳小のところにあったことや歴史が古いことも知っていたが、それ以上のたくさんの情報を得られて有意義だった。ただ、盛沢山だったので、もう少し詳しく発掘の話を知りたかった。
- とても興味深い論点で、改めて自分でも調べてみたいと思いました。
よい機会をいただき、ありがとうございました。
- 歴史と遺跡についての様々な視点からの講演で興味深いものでした。
- 建築の変遷が理解できた。
- 資料の文字が小さくて見づらいのが残念でした。
- 前回のシンポジウムの記録をネットでみて、発掘物を実際みたかったので今回見れてうれしかった。

- 跡見学園の統通がよくわかりました。
- 孫が柳町小に在学中で校舎建築のために発掘作業を遠目で拝見。
- 約70年前、小学校（文京区立昭和小学校）の同級生で優秀な女の子が跡見学園の中学に入ったのを思い出しながら、シンポジウムを聞いていました。
- 娘が跡見でお世話になっております。
歴史ある学校で学んでいることにとても幸せに思います。娘にも伝えます。
- 跡見学園の歴史を遺跡を通して知ることができ、受け継がれていく文化を感じました。
- もう一つの校歌を知り、歌えたのはよい経験でした。
- 遺跡や発掘という切り口のシンポジウムと思ったので前置きが長くもたつきを感じた。テイケイトレードのプレゼンはよかった。特に渡辺さんの発表に若い方の熱意を感じ、頑張っしてほしいと思った。
- 柳町周辺にはよく買い物に行きますので、とても身近に感じることができました。あの土地に御塾と大池があったのだと感慨深いものがありました。ありがとうございました。
- 遺跡や跡見についての理解が深まり、興味深くお話を聞かせていただきました。
- 次回も楽しみにしております。
- わかりやすい説明でとても興味深く、楽しく拝聴させていただきました。出土品等を分析することで数々のことが今生きているように分かってくる。発掘とは奥深く、また大切なもの、温故知新ですね。チラシのデザイン（色・レイアウト等）がとてもステキで行ってみたいと思わせていただきました。
- 校歌があとふたつあるとは知らず、歌ったのは楽しかった。（「桜はな」は今も秘かに愛唱しています）
- 知識が深まった。大塚移転後の話やパネルもあるのもっとよかったのではと思いました。
- ・小関、若林両氏のごきげんようのご挨拶
・花蹊先生の笑顔のお写真
・お二人の校歌斉唱 →すてきだったもの3つです。
- 明治・大正・昭和の女学生の暮らしぶり、使っていた生活用品などが詳しく知れるシンポジウムかと思った。
- 150年の歴史のある学校なのだを知ることができ、近隣住民ですが跡見学園のことを身近に感じられました。
- 発掘調査の報告が大変興味深かった。卒業生がプロとして調査に関わったというのもよい話と思いました。
- 多角的で素晴らしかった。
- とても温かで花蹊先生の愛にあふれた会だと思いました。
次回の発掘調査の発表も楽しみです。
- 卒業生でありながら今まで知らなかったことも多く、興味深く拝聴させていただきました。遺跡の発掘の気の遠くなるような作業の偉大さに改めて気づかされた。これらを未来につなげていかれたらと思った。花蹊先生の笑顔の写真が印象的だった。
- 地層や出土品、現存する当時の資料から跡見学園が歩んできた歴史、そして創立当初の時代、文化を読み解くことができることが大変面白かったです。また、校歌を通して跡見花蹊先生の精神を感じることができました。本日はありがとうございました。
- 内容の濃さにびっくりいたしました。跡見のこと、知らなかったことも多く、これからいろいろ調べたり、勉強して理解を深め愛校精神を発揮していきたいと思います。改めて「跡見大好き」です。これからもよろしく願い申し上げます。
- 昔の校歌を聞くことができ面白かったです。
日頃、発掘調査に関わっているので、多くの人に埋蔵文化財について知ってもらえる機会となってよ

かったです。

- 静岡県に住む跡見同窓生（元跡見職員）から連絡があり、このシンポジウムで久しぶりに会うつもりで参加しました。よいきっかけになりました。我が家も100年以上建って整理していますが、自分の学問のルーツ、大学教育を受けた恩恵などを考える歳になりました。このシンポジウムはさらによりきっかけでした。
- 跡見学園の様々な面を聞くことができ面白かったです。
- 初めて知る話ばかりでしたが、どれもとても興味深いお話でした。
- これまで馴染みのない考古学という分野として（卒業生でありながら）初めて知る花蹊先生の偉大さを垣間見ることができ、大変勉強になりました。不言亭にも興味がわきました。
- 参加者が少なくてもったいないと思いました。
- 写真も豊富で見ごたえがあった。30分休憩は長すぎた。
- 娘が通う柳町小学校の歴史や貴学の建学精神、地域文化など得るものが多かったです。
- どのご発表も大変興味深く、またうれしい発見も多いものでした。次回のシンポジウムも楽しみにしております。
- 発掘調査、遺物整理をしていた身ではあるが、建物の基盤となる杭がどのように打たれているのか、どの点を以て跡見生が使用していたかわかるのかという事を深く知ることができた。
- 跡見学園に関する歴史を深く知れて楽しかった。
- 分かりやすいラインナップで面白かった。
- 花蹊先生の挨拶で始まった小関女史と若林女史の発表がうれしかった。
小野氏の地歴考査が素晴らしかった。有難う。
- 跡見学園開学当初の写真など資料とともにお話をきくことができ、大変有意義な時間となりました。
- 説明が分かりやすかったです。
校歌の第2番に感動しました。
大君の為、日本国の為に作られたことに。
- 自分の通う学校について、様々な観点から理解を深めることができ、非常に興味深かった。
- 遺跡の重要性を未来へつなげていくことの意味を感じることができた。また、柳町を中心とした周辺の状態、跡見女学校の変遷を学ぶことができ、大変良い機会となりました。
 - ・遺跡と人々の生活のつながりが分かりやすく解説されていてよかったです。
 - ・過去と現在が地続きであることが知れた。
- 方面の違う発表が面白かったです。
- 遺跡物から学園の様子がうかがえた楽しいシンポジウムでした。
卒業生が調査に関わっていることが感動でした。

【展示に関する感想】

- もう少し種類があれば。
- 遺物について、全体像もあると良いと思いました。
- 形が綺麗に残っているものが多く驚きました。
小野さんのミニ解説も大変勉強になりました。
- シンポジウムとあわせて、「場」の記憶を共有できるような素晴らしい展示でした。
- ・学校、学生関係のものがもう少しあると思っていた。
 - ・同時に展示されていた跡見花蹊と質店の展示が有意義だった。
 - ・新座での特別展への関心が大きくなった。

- 私が通学していた時代は、授業に本学のことを学ぶ機会があまりなかったように感じます。今はそうでもないかもしれませんが、自分の学校の歴史を調べる時間が多くあるといいなと思いました。
- 展示への興味関心に加え、休憩時の小野氏による解説が非常に有意義でした。
- 説明があってよく理解できた。
- 跡見学園出身だが、展示等を拝見して今まで以上に身近に感じる事ができた。
- 魅せ方がよかったです。
チョイスもナイス！
- 量と解説を多くしてください。
- テイケイトレードの調査報告のあとに見させていただき、理解が深まりました。OGの説明もわかりやすかったです。
- 柳町の南西部のことでしたが、今後さらに北の方の発掘が進み、さらにいろいろわかれば、また話を聞きたいです。
- もっと展示品の数が多いのではと思って早めに来た。
牛乳瓶や筆記用具などもあって面白かった
- 大きさや質感がわかってとてもよかったです。
- 出土品をみることで当時の様子に思いをはせ、まさに生活のリアルを感じる事ができた。
- 貴重な文化財を拝観させていただき、とてもうれしく思います。
仕事で取材中、見聞きした写真とお話から明治・大正・昭和初期の人々の生活をリアルに想像することができ楽しい時間となりました。
- もっと多くの展示が欲しかった。
- 出土品の解説がそれぞれにあるといい。
- 跡見を見直すよい機会になりました。とても良いシンポジウムになったと思います。
- 日常生活の状況がよくわかりよかったです。江戸時代のは？
- 中猿楽町時代と比較できるとさらによい。
- 写真集など出していただけると生徒たちにも刺激になると思います。
- 出土品から見える文化・生活を見ることができ、大変興味深く、勉強になりました。
- 貴重な研究成果をみれて楽しかったです。
- 出土品を見ていると、自分がその時代に居るような気になって、昔のこととは思えなくなりました。
- 女学校らしい遺物が出土していることが、リアルを感じられました。歯磨き粉の出土は考古資料と文献資料の符合となり感動した。
- 昔の牛乳瓶が今とだいぶ違って面白かった。
- 古いガラス瓶は好きな人がいるので由緒あるものは人気があると思います。木製の鉛筆やペンの軸が土の中から出てきているというのは驚きです。菊坂跡見塾で実際に学芸員として活動できるのはよいことだと思いました。
- 発掘された小瓶がキュート。
- 貴重な資料を間近にみる事ができよかったです。
「跡見花蹊と跡見女学校」の企画展もぜひ見たいと思った。
- 貴重な出土品を拝見でき、そこから当時の文化を感じ取ることができました。
とても貴重な体験ができて楽しかったです。ありがとうございました。
- 時代を感じ、当時の花蹊先生や皆様のご生活の様子を感じられ、とても素晴らしいものでした。これからも大事に保存できるように願っております。またの機会を楽しみにしております。
- 「汲泉」が興味深かったです。

- お忙しい中でのご準備、大変だったかと存じます。お疲れさまでございました。
- 解説もしていただき満足です。
- 間近でみることができよかったです。
- シンポジウムのお話を伺って展示品を見ると、また感慨がひとしおでした。歴史に思いをはせる時間となりました。
- 出土品の見やすさ、観客らの見え方もかなり丁寧にやられていたのでとても理解しやすかったです。
- 史料そのままの遺物を実際に見れて、解説もしていただけて学びが深まった。
- とても勉強になりました。
- もっとたくさん並んでいるとうれしかった。
- 実物を間近でみることができよかったです。
- 分かりやすく、写真、イラストも良かったです。
- 拳銃の玩具や歯磨き粉の蓋など、当時の暮らしを想像できるものや学生たちの遠足の様子を知ることができるものが展示されており、とても面白く勉強になった。
- 実物をみることで、シンポジウムの講演内容の理解を深めることができた。
- きれいに展示されていてうれしかったです。
- 貴重な資料を拝見することができてよかったです。
- ピistolのおもちゃが興味深かった。
- 学園の歴史を実感できるもので大変刺激をいただきました。

跡見学園女子大学地域交流センターブックレット vol.6

文化遺産がつなぐ過去と未来

発行日：2026年3月15日

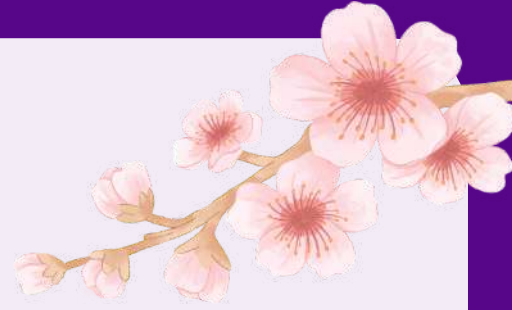
編 者：跡見学園女子大学地域交流センター

発 行：跡見学園女子大学地域交流センター

〒112-0012 東京都文京区大塚1丁目5-2

電 話：03-3941-7420

印 刷：セントラル印刷(株)



跡見学園女子大学 地域交流センター ブックレットVol.6

文化遺産がつなぐ過去と未来 — 跡見女学校 明治・大正・昭和の暮らし —

歴史のリアルを掘り起こす 跡見学園女子大学 学長 小仲 信孝

基調講演

「遺跡が語る地域の記憶」
京都芸術大学 芸術学部 教授 石神 裕之

報告①

「明治期の跡見女学校」
跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部 准教授 小関 孝子

「大正期の跡見女学校」
跡見学園女子大学 花蹊記念資料館 学芸員 若林 範子

報告②

「発掘された跡見女学校と明治の暮らし」
テイケイトレード株式会社 埋蔵文化財事業部 小野 麻人

「柳町時代の跡見女学校の建物について」
テイケイトレード株式会社 埋蔵文化財事業部 渡辺 恵未

報告③

「<跡見「学芸員」 in 菊坂>が読み解く柳町周辺の様子」
跡見学園女子大学大学院 人文科学研究科1年 黒木 真悠

閉会あいさつ 跡見学園女子大学 地域交流センター長 土居 洋平

シンポジウム参加者アンケート結果



跡見学園女子大学

ATOMI UNIVERSITY

跡見学園女子大学 地域交流センター
〒112-8687 東京都文京区大塚1-5-2

